

レオナルドに憑依した俺の転生生活

あるアルミン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハイスクールのレオナルドに憑依した俺と魔獣創造で作り出した怪獣達との鮮烈で強烈な非日常生活である。

これから貴方の魂は、貴方の肉体を離れ、このカオスな空間に吸い込まれていくのです。

注意 カオスな物語と破茶滅茶な展開が予想されます、スマホ投稿です、この作品は9割型作者の妄想と願望で出来ています。

目次

レオナルドに憑依した俺の始まりの日	1
旧校舎のディアボロス	
怪獣娘殿下	3
怪獣達の秘密	9
ゼットンのは娘	16
転生者の光と影	24
出会いの鎧	31
戦闘校舎のフェニックス	
閉ざされたレーティングゲーム	35
出撃!!ブルトーンキューシユツ作戦	40
黒き王の覚醒	45
脱出ーエスケープー	49
怪獣は何故戦うのか?	55
月光校庭のエクスカリバー	
ファーストコンタクト	60
虹の怪物魔境	65
絶対の捕食者	69
暴走する愛憎	73
奪われた聖剣《エクスカリバー》	80
僕の中の怪物	85
キャラ設定(ネタバレ有りかも)	90
復讐の一太刀	94
裏切りの刃	99

狙われた学校	104
心からの願い	111
停止教室のヴァンパイア	
みんなの楽園	119
夏が来たら	126
大変!!魔王獣が来たツ!!	131
絶望の降臨	138
怪獣対三代勢力対禍の団	145
美しき(日常の)終末	149
皇の世界が始まる日	154
光と闇	160
冥界合宿のヘルキャット番外編	
怪獣娘と暮らすオリ主の苦難	
(笑)編	
ベリアルは動かない	167
毒牙のバレンタイン	172

レオナルドに憑依した俺の始まりの日

あー、いきなりですが皆さん憑依ってご存知ですか？

そうです、前世の記憶を持った魂が別の生物の魂に合体してその合体した生物として生きていく事になる。俺の中にある知識を全て掻き集めて考え出した理論です。

まあ、別の要因かもしれませんが、転生と違って元からある肉体に入るというわけで、何方かと言えば転生の方がアドバンテージが高いと思います。

しかし、皆さん。何故そんな話をするのか？……と思われていると思いますが、実は俺、今現在進行形で憑依しちやっってるんですよ。

そうなんです、憑依しちやっってるんです。ハイスクールD×Dのレオナルドに……

確か、レオナルドって禍カオスの団ンブリゲードって言う厨二病的な名前の集団に拉致られて、無理矢理セイクリッド・ギア神器セイクリッド・ギアを使わされて、最後には神器セイクリッド・ギアを暴走させられて、最終的に廃人にされる終始可哀想なキャラじゃ無いですか!!!

くうう、元冴えない影薄刑事の俺がこんなパワーインフレな世界を生きていけんのかよ……

……………グッ!!こうなったら未来絶望少年脱退の為に神器を使いこなすしか方法は……………無い!!!
そして!!絶対に変態ブリゲードなんかに入らないようにする!!!

「よし!!!思い立ったが吉日だ!!鍛えて鍛えて、憧れの響鬼さんみたいになってやる!!」

森の奥

えーと、レオナルドの神器セイクリッド・ギアって確か『魔獣創造』だったつ

け？

確か自分の考えた魔獣を作ることができるとは思ってたけどな

……………チート乙、これはチートだな。

バランスブレイク

バンダースナッチ・アンド・ジャバウォック

んで、禁手すると破壊の魔獣 鬼なるけどその後廃人に

バランスブレイク

なっちゃうから別の禁手を見つけなくちゃな

……………

まずは、セイクリッド・ギア 神器の現出からだ。

……………

ヤバイ!!! アナリアルイション・メーカー 魔獣 創造の形状知らなかった!!!

どうしよう!! これじゃ特訓どころじゃなくなっちゃう!!……………

どうすれば、……………そうだ、確かセイクリッド・ギア 神器は、

使用者の思いに応じてその形状を変えるんだ!!

……………考えるんだ……………俺の……………俺だけの

……………力の形を!!!

……………

魔獣……………操……………バトルナイザー

……………

突然、光がレオナルドを包み込んだ、その光が治るとレオナルドの手には1つの機械が……………

え、え、エエエエエエエエツツツ!!!

!!!バトルナイザー!!……………いやコレが1番適してるんだ

……………何方かと言え

……………

ばギガバトルナイザーの方が良かったけどね!!!!

こうして、レオナルドに憑依した男のレオナルドバッドエンド脱出

計画がスタートしたのだった

旧校舎のディアボロス 怪獣娘殿下

どうも、おはようございます、こんにちは、こんばんは、レオナルドです。

いや〜（´・`・）転生してから早、四年……………原作より早く産まれたから今は中学3年生をやっています。レッツピースライフを満喫してやるぜ!!

今、俺は駒王町にいます。その方が何かと便利でしょ。

「こんにちは、小猫お姉ちゃん、」

「……………こんにちは、レオンちゃん」

彼女は先輩の塔城 小猫先輩、俺は親しみを込めて小猫お姉ちゃんって呼んでるけどな。

後、レオナルドって長いからみんなにはレオンって呼んでもらってるんだぜ。レオンってなんかカッコいいよね!!

あつ、あの人は

「朱乃先輩、こんにちは」

朱乃先輩、凄く優しく美人な先輩で凄く頼りになる方なのだ!!

「あつ、イツセー兄今帰り?」

「おう!、レオン!実はな俺彼女出来たんだよ!!」

「えっ?!マジで!!凄いいじゃん!!おめでどう!!」

「それで、今からデートなんだよ」

「頑張つてね!!」

イツセー兄はウキウキしている。

「イツセー兄……………」

「?、どうした?レオン?」

「危険な事だけはしないでよ。俺、イツセー兄の事、心配してるんだから」

少し上目で潤んだ目で頼み事をすれば、昔いろんな人がお願いとかを聞いてくれる。……………不思議だ。

「……………レオン……………お前だけは、お前だけは絶対に守ってやるからな!!」

……………計画どおり!!ヤバイ!!計画どおり過ぎる!!
でも心が!!心が痛い!!

これで、イツセー兄が悪魔になっても俺が何も知らないと思って巻き込まないようにする筈だ!!これで俺の平穩は当分は大丈夫だ!!でも!でも、凄く心が痛い!!!!

この後イツセー兄は殺されちゃうけど大丈夫!!俺がイツセー兄を助けるから!!

—————
イツセーSide

涙目で弟に悲願されたイツセーだ、大丈夫だお前は俺が守ってやるから……………

これから夕麻ちゃんデートに行くのに、こんな悲しい気分じゃ駄目だ!!気持ちを入れ替えないと……………よし、今日を人生最大の幸せな日にするぜ!!

なんて考えてた時期が俺にもありました。

え？何？死んでって言われて夕麻ちゃんの服がパーンしてエロい服になって光ってる槍みたいなの物向けられてる!!

「安心しなさい、貴方の弟も時期に殺してあげるから」

え え？ 俺、 此 処 で …………… 死 ぬ の か？

……………ゴメンな、レオン……………約束、守れなくて

夕麻、いや墮天使レイナーレの光の槍が投げられた。死を悟った俺は、目を瞑る。、がいつまで経っても衝撃がやって来ない。

恐る恐る目を開けると、

「ふえええ、間に合った、間に合った」

女の子だった、三日月のようなツノを生やし茶色い尻尾の付いたスクール水着を着た少女が光の槍を砕いていた。

「なっ!!何者だ!!貴様!!この公園に人払いの結界が張られていた筈!!」

「公園には張られてるけど、地面の下には張られてなかったよ」

よく見ると、彼女の足元に人が1人通れる程の穴が空いていた。

「まさか!!地面を掘り進んで来たと言うのか!!」

「そうだよ、あつたり〜」

ズガガガガツツ!!!

レイナーレ目掛けて何処からか攻撃が飛んでくる。

「くっ!!」

既のところでそれを避けるレイナーレ、そして、穴からまた誰か出てきた。

「あひやひやひや」

それは自分を助けた少女そっくりの少女だった。

「あッ！Ⅱちゃん！まだ出てきちゃい駄目だよ!!」 あせあせ

「あひやひやひやひやひやひやひや」

笑いながら、レイナーレに向けて腕からバルカン砲の様なものを連射している。

しかし、突然、魔法陣の様なものが見れ攻撃をやめた。

「ちッ!!グレモリーの家紋か……………今日のところは此処までにしといてやろう!!だが貴様!!お前は絶対に私が殺す」

と、何ともまあ、小物くさいセリフを吐いて逃げ出した。

「あ、逃げちゃった。マスターには此処で仕留めろって言われてたのに……………まいっか、Ⅱちゃん、帰ろ♪」

「あら、そうはいかないわよ」

魔法陣の中から出てきたのは、駒王学園の二大お嬢様の1人、リアス・グレモリー先輩だった。

「貴方達の事、しつかり聞かせてもらおうわよ」

リアス先輩は赤いオーラを右腕に溜め出した。が、

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッツツツ!!!

Ⅱと呼ばれたこのバルカン砲が撃たれる。

「ッ！、待ちなさい!!」

リアス先輩は赤いオーラの球を作り出し彼女達に向けた瞬間、結界を貫通してきた何か、それをかき消した。

「じゃあね、あ、僕、ゴモラ!!こっちはゴモラⅡちゃん!!じゃ、またね」

ゴモラと名乗った彼女は草むらにダイブイン、それに続いてゴモラⅡもダイブイン、リアス先輩がそこに着いた時には人1人が通れる程の穴が空いていた。それも穴の中から出てくる土によってまた埋まってしまい、追いかける事は出来なかったという。

レオナルドSide

『ふえええ、間に合った、間に合った』

今俺は、公園からかなり距離の離れた山の一箇所の一部始終を見ていた。

よかった、間に合って……でもゴモラ行かせてよかったかな？……でもあいつはうちのエースだし、大丈夫だよな？

え？何でそんな所にいるのかって？それはですね、俺の持つ2つ目の神器を使うからだよ。

昔此処に来る前に、ある人に助けてもらったんだ。それでその人、あと少しの命で死ぬ時に俺に託してくれたんだ。

その名も、『無限の武器創造』、自身の考えたありとあらゆる武器を作る事が可能なんだぜ。何処かで聞いた事ある様な名前だけど………

そして、俺が創造するのは………キングジョーブ
ラックの『ペダニウムランチャー』

右腕に光が集まり、ペダニウムランチャーが装備される。スカウターの様な望遠レンズで公園を見る、リアス先輩がちょうど滅びの魔力を貯めているところだった。

腰を下ろし、ペダニウムランチャーを構える、スカウターのロツク機能がリアス先輩の滅びの魔力を捉える。腕に当たらず尚且つ滅びの魔力を完全に吹き飛ばせる位置に、

「狙い撃つぜ」

ズキウン!!

ペダニウムランチャーから放たれた光線は寸分の狂いもなく滅びの魔力を消し去った。

「よし、成功だッ!!」

ゴモラ達もうまく逃げたみたいだし、俺も家に帰ることにした。

また、家に帰った後、ゴモラ達にご褒美（美味しい料理）をせがまれて大変だったと記して置こう。

怪獣達の秘密

オカルト研究部

「私達が悪魔と言う種族である、と言う事は理解したわね？」

「はい、にわかには信じ難いですが……………」

リアス先輩及びオカルト研究部の面々が全て悪魔と言う種族であると言う事を聞かされ更には自分自身も悪魔だと知った。

「さて、次は…………昨日、貴方を助けたスクール水着のゴモラと名乗った少女の事だけ……………」

「はい、その事で知っている事があるんです」

オカ研の面々は揃って驚いた。

「彼女の名前、ゴモラってテレビ特撮でやってる『ウルトラマン』つてのに出てくる怪獣の名前なんです」

「……………でも、それって想像の産物の中のものでしょ？」

「でも、あの三日月型のツノに太くて茶色い尻尾、あの子の特徴がどれも一緒なんです」

「でも、そんな事…………『有り得るはずがない』ツ!!だれ!!」

いつの間にか俺の隣にスーツ姿の女性が座っていた。

……………胸でけ!!!!

「ふふ、別に怪しい者じゃない……………隣の君には、この姿の方が馴染みがあるのではないか？」

スーツの女性が顔を腕で撫でると、その姿は異形の存在に変わった。

「ツツ!!え!!え!!ケツ!!ケムール人…………いや、ゼットン星人か?!!」

「ご名答、私はゼットン星人エド、エドと呼んでくれ」

エドはまた顔をスーツの女性の顔に戻すと、朱乃さんに紅茶を頼む。

「で?エドさん、貴方は一体何者なの?本当に宇宙人なのかしら?」

「そう、いきり立たつな、急がなくても逃げやしないよ、今はね。優雅にティータイムと洒落込もうじゃないか」

エドは足を絡めると、出された紅茶を優雅に上品に飲む。…………小猫

ちゃん、どうしてエドさんの胸を親の仇の様に見てるんですか？

「まず、私達は何者か？……………と言う質問だが、私達は神滅具アナイアレインジョン・メーカー『魔獣創造』によって創造された魔獣だ」

「なツ!!魔獣創造ですって!!」

「えと、あの、部長…神滅具ってなんすか？」

エドさんが説明してくれた。

「神滅具と言うのはね、文字どおり、神をも殺せる程の力を持った神器の事を指すんだよ。その中でも、魔獣創造は所持者の考えた生物を作り出す事が出来る。私達はそれで生まれたんだよ」

えっ!!つまり、それってアニメの中のキャラやゲームの中のモンスターまで作れるって事か!!

「コレで、私達が何者か、わかっただろう」

エドさんはまた、紅茶を飲む。

「ええ、貴方達が神滅具によって作られたのは分かったわ。なら貴方を創り出した創造主の事を聞きたいのだけれど……………」

「おっと、それは出来ない。マスターの事は企業秘密だからね。そうだな……………マスターの事は、これから『アンノウン・ハンド』と呼んでくれたまへ」

「アンノウン・ハンド、闇の見える手……………」

「そうだ!エドさん!!聞きたい事があるんだけど!!」

「何かな?兵藤一誠君」

アレ?俺、エドさんに名前教えたっけ?

「え?何で俺の名前を……………」

「すまないね、此処に来る前に少しばかり調べさせてもらったんだ」
そ、そうなのか、びっくりした。だが、そんな事でいちいち驚いてられない!!

「あの、エドさんの所の怪獣達はみんな、女の子の姿なんですか？」

コレ!!これが最大の問題!!もしそうなら!!ちよーっ羨ましいぞ!!

「?…………ああ…………いやそう言う訳では無い。普通に怪獣の姿をした奴

もいれば私の様に人間に擬人化している者もいる。彼らは皆、マスターを溺愛しているからね、皆、マスターに好かれようとして女の子の姿になっているんだ」

な　　ん　　.....　　だ　　と

.....!!!　　なんて!!　　なんて羨まし

いんだ

!!　　女の子たちに好かれまくるとか!!　　まじ羨ましいぞ!!!

「ハックチュンツツ!!」

う　　う　　ー　　ん、　　誰　　か　　が　　噂　　し　　て　　る　　の　　か　　な　　?

.....

「どうしたの? 風邪? そんな格好してるからだよ」

「万年スク水のお前が言えた事じゃ無いだろ」

どうしてみんな、女の子の姿になるかな?　　うち、擬人化女の子6割、
怪獣形態4割だよ.....

イツセー

エドさんが帰った後、俺たちははぐれ悪魔なるものが現れたと報告

された倉庫跡に来ていた。

「貴方には、これから悪魔の戦いを知ってもらおうわ」

「え?.....俺、なんの戦力にもなら無いと思いますけど、」

「今回、貴方には見てもらうだけだから心配いら無いわ」

暗闇の物陰より何かが出てきた。

「はぐれ悪魔バイザー!! 貴方を滅しに来たわ!!」

部長が叫ぶと、闇の中から上半身裸体の女、下半身化け物の異形が出てくる。だが、その様子がおかしい。その時、バイザーが前のめりに倒れこむ。

「あら〜♪ゴメンなさい、もうこの娘は私がハントしちゃった」

その化け物の隣から黄色いマダラ模様が特徴的な服を着た黄色い髪のエロいお姉さんが出てきた。

「貴方、何者かしら? 私の領地で勝手な事『あら? 貴方の領地だったの? ゴメンなさい♪でも、貴方の領地の治安はとても悪いのねえ。この一ヶ月間30匹程のはぐれ悪魔を倒したのだけれど、あのまま放置していたら、ふふ、どうなっていたかしらね』なッ!!.....朱乃、他に依頼はあったかしら?」

「いいえ.....この依頼以外来ていませんわ」

エロいお姉さんはクスクスと笑うと、

「ウッフ、貴方たち、エドとはお会いになったのでしょうか? なら私の正体、当ててごらんなさい」

と、名前当てゲームを仕掛けてきた。普通なら初対面の人の名前なんてわかるはずが無い、だが、彼女の特徴とエドさんの知り合いなら導き出される答えは1つ。

「エレキング.....さん、ですね」

「ふふ、正解よ。ボーヤ、私はエレキング、以後よろしくね」

エレキングさんはウィンクを飛ばしてくる。正直、心臓がドキドキする!!

「貴方には聞く事があるわ、はぐれ悪魔の事、貴方のマスターの事………」

「あら？簡単に聞けると思ってた?」

「なら、力づくで!!」

木場が動き出す。すごいスピードでエレキングさんに近寄る。

「もう、レディに刃物を向けるものじゃ無いわよ」

エレキングさんは木場が振り下ろした剣を難なくかわし、木場の唇にキスする。瞬間、木場が一瞬痙攣し、口から煙を吐き倒れる。

「木場!!」

「裕斗!!」

「大丈夫よ、殺してはいないわ。ただ、少しばかり刺激が強すぎたみたい。い♡」

エレキングさんは唇をなぞるとそこから、なぞった指が光りだし、その指をこちらに弧を描く様に振るう。

ビュンツツ!!

ズガアンツツ!!

光るカッターの様なものが、足元のコンクリート床を削る。

飛び跳ねて避けた小猫ちゃんがエレキングさんに突進する。小猫ちゃんのパンチは当たる直前、エレキングさんに腕を掴まれ止められ

た。

「なかなかだったわよ。貴方には40点あげわ」

小猫ちゃんに落雷が落ちた。いや、エレキングさんから流れる電撃をくらい失神してしまう。

部長も朱乃さんも、強く警戒する。

「……………時間切の様ね。……………なかなか楽しい時間だったわ、ありがとうね」チュツ、

お別れの投げキッスと共にエレキングさんの周りに煙が立ち込める。

煙が消えた頃にはエレキングさんの姿は何処にもなかった。

レオナルドSEED

「エレキング!!抱き着くなよ!!」

「え〜？いいじや無い、ちよつとくらい」

「だからって全裸で抱きついてくるなよ!!恥ずかしいだろ!!!」

変態狂乱ピンクのエロキングに襲われていた。誰か助けて（涙）

ゼットン⁶は娘

次元の狭間

見渡せば全てが無であるこの空間、そこに住む2つの影。

赤き夢幻の真龍、アボカリユプス・ドラゴン『真なる赤龍神帝』

グレートレッド

もう1つは、黒き無限の龍神、ウロボロス・ドラゴン『無限の龍神』

オフィス

そこに、忍び寄る漆黒の影1つ、

「貴様、何者？」

「グルルルル!!」

2つのムゲンはその者に激しく警戒する。

その者、答える。曰く、

「我はこの地に永遠の静寂をもたらす者」

何処までも黒くドス黒いドレスを身に纏い、赤き真紅の目に映る2人、

「恐れる事は無い、貴様ら全て、スパークドールズにして時間を止めてやろう」

それは圧倒的な闇、闇の支配者

「我が名はルギエル、ダークルギエル」

レオナルド視点

「あれ？やっぱりなん体かなくなってる!!」

「?、マスター?どうしたの」

「ねえ、ゴモラ、怪獣達が少し居なくなってるんだけど何処に行ったか知ってる?」

怪獣達は基本自由気ままだ、ゴモラは少し悩んだ後、

「バイトやら仕事に行ってるよ」

「え!!バイト!!仕事!!」

衝撃の事実!!怪獣達は仕事してた!!でもなんで!!

「うん、みんなね退屈しのぎとかお小遣い稼ぎとか」

お小遣いか、俺もそんな時があったな。

墮天使陣営

「本日よりアザゼル様の秘書になります、『シユヴァルツ・ロワ』にご
ざいます」

小麦色の肌に真ん中の髪が金色の女性は挨拶をした。

「お、おうー！よ、よろしくな……………」

彼女は、圧倒的な火力を持っていた、そう、全てを焼き尽くす獄炎
のマグマを、
神器では無い、彼女にはの持つ固有スキル、それ故にこう呼ばれて
いる。

『灼熱の用心棒』

アースガルズ

「なんじゃ、つまらんの……………この程度で邪神を語るとは、片腹痛い
わ!!」

髪の毛の先は触手、帽子の代わりにアンモナイトの様な殻をかぶり、そ
の殻の横にある2つの穴から2匹の蛇が顔を出している。
彼女は邪神、新たに生まれた

『究極の邪神』

教会

「我が聖なる炎によってチリと消えろ!!」

その炎は、邪なるものを焼き払い清める。彼女は元最強のエクソシスト、

『閻魔戦士』

みんなバイト頑張ってるんだろうな………俺たちも頑張らなくちゃ!!

「ねえねえ？確か今日だよね、あーしあつて子が堕天使に捕まって殺されるのって、あの人たちで大丈夫かな？」
「それなら大丈夫だよ!!」

入り口

「あ〜れ〜？どなた様でございますか〜？」

ドアを切り捨て、鎧に身を包んだ異形の鎧武者が現れる、

「我が名は、ザムシャー」

外回り

「ツツ!!貴様!!我々を裏切る気か!!!」

1人の神父が突然仲間を攻撃しだし、次の瞬間、ミットルテとカラ
ワーナを石像へと変えてしまった。

「元より貴様の仲間では無い、貴様ら全員ブロンズ像にしてやるよ」

赤い体に象の様な鼻をしたタコの様な姿をした異形の存在ヒツポ
リト星人が姿を現した、

教会の地下

「グハア……………グ!!……………」

「えと?貴女は……………」

儀式により命を奪われそうになった聖女　アーシア・アルジエン
ト、十字架に縛り付けられた彼女を助けたのは、

「ゼットン……………ピポポポポ」

「ゼットン……………さん?」

黒く長い髪に、2つのツノ、黒いドレスを身につけた最強最悪の怪
獣女子　ゼットンだった。

その圧倒的な力で神父達とレイナーレを蹂躪する。

「ザムシャーにヒツポリト星人にゼットンを向かわせたんだけど
……………過剰戦力すぎたかな?」

「やばすぎじゃない!!よりもよってゼットンちゃん連れて行くのはヤバイよ!!」

「ちなみに、ザムシャーとヒツポリト星人は擬人化してないよ」

ズドオンツツ!!!

ゼットンのパンチが地面を陥没させる。まともにくらえば、ひき肉にされていたかもしれない。即時に光の槍を作り出し、反撃する。

シユンツ!!シユンツ!!シユンツ!!

それもゼットンの瞬間移動能力により回避される。

ガガガガガガガガツツツ!!!!

乱射されるゼットン光弾に苦戦を強いられる。強力な光弾の雨あられに回避するだけで精一杯。その余波で他の神父が巻き込まれやられていく。

「私は!!私は至福の墮天使になるのだぞ!!」

巨大な光の槍を作り出し投げる、が、

「ゼットン……………」

両腕と胸で光の槍は吸収される、それだけでは無い、波状の光線にして跳ね返ってくる。

ゼットンは突如上昇する。空中で停止しゼットンを中心に膨大な量の魔力が凝縮されていく。その魔力は徐々に火の玉と化し巨大か

していく。

まるで、太陽の様に、轟々と燃える火球は全てを滅ぼし飲み込むかの様だ。

「そ、そんな……この魔力量……魔王並、いや!!それ以上なんて!!!」

『一兆度の火球』

絶望の太陽がいま墮とされた。

イツセー視点

「な　ん　だ　よ　……　こ　れ
……」

俺達3人は、部長に黙ってアシアの救出に来たら、その教会がなくなっているでは無いか。

「まるで、燃えた様だけど、一体、何故?……」

その時、燃えた教会跡地からアーシアが出てきた。

「アーシア!!大丈夫か!!」

「はい!ある人に助けられたので!!」

「ある人?」

アーシアを助けた人物とは何かアーシアから語られた人物の名前に驚愕する。

「はい、ゼットンさんと言う方に助けられました」

転生者の光と影

「今日は平和だな、なあ、イフ♪」

今日は何故かみんなうるさくない。とてもありがたいことだ。そう思いながら腕に抱えた白い団子のような物体を撫でている。

こいつの名前は『イフ』、完全生命体と呼ばれる最強怪獣の一角で俺のペット、この状態の時はとても可愛い。撫で撫でてあげるととても嬉しそうにする。

良く頭に乗せて散歩しているから、小学生とかから『お餅のおにいちゃん』って呼ばれてる。可愛い奴だな。

イフの特徴は1つ、『受けた刺激を増幅し再現する』事、どんなに強い攻撃を受けてもそれを学習しその攻撃方法及び能力を身につけ反撃しながら強くなっていく。

前例では、

ナパーム弾で攻撃↓全身から弾切れなしのナパーム弾を乱射

ミサイルやレーザーを撃った↓弾切れなしのミサイルやレーザーを乱射

ウルトラマン必殺光線で倒す↓即再生、ウルトラマン必殺光線を無限乱射

まさに、最強!!怪獣の中で無限、チートの称号を持つ。が、こつちから攻撃しなければ無害で可愛い怪獣だ。

他のみんなは、『どうしてそんな危険物を頭に乗せて散歩させているのか!!?』なんてハラハラしている。

それと、誰かが勝手に時間を操る怪獣を使って時間を改変させてしまったようだ。

使われた怪獣は、

クロノーム、ダイダラホーシ、ゴルドラス、エアロヴァイパー、アラドス、など、

やばい!!時空が歪む!!大変な事になる!!!!

と違ってたら本当になりました。

空間が歪んだかと思ったら、そこから銀髪の女性が舞い降りてきた

!!

数千年前、

「愚かなる羽虫どもよ!!我が究極の闇にひれ伏すが良い!!」

世界は邪神ガタノゾーアと大量のゾイガーにより滅亡の危機に瀕していた。

「ガタノゾーア様」

「む?なんじゃ、ゴルザ」

「このままでは、未来のレオ様にも被害が出てしまいます。この辺でおやめになられては?」

「む!!分かったのじゃ…………レオには怒られたくないのじゃ…………あの時のレオは怖かったのじゃ…………」
ガクガク!!

ずっと前にマジギレしたレオナルドを思い出し震える。

ガタノゾーアは邪神として生まれた為、威厳を取り戻すために過去に戻り大暴れしていた。

これは原作に多大な影響を与えた。と言うか自由勝手にやってるだけ。

「えと…………大丈夫ですか……………」

「あの、ここは何処なんでしょうか？」

銀髪の女性はそんな事を聞いてくる。

「ええと……………駒王町だけど」

「駒王町?冥界のどの辺りでしょう」

冥界!!なんか話が噛み合わない!!

「え?!此処は人間界ですけど……………」

「え!!……………では、今日の日付は？」

確か……………

「20×年、4月3日ですけど、」

「……………20×年……………」

えと……………もしかしなくても……………この人過去から

来た人？

「えと…あの、もしかして、過去から来られたんじゃない？………」

だつてこの人!!どう見ても『グレイファイア・ルキフグス』だもん!!!
もしかしなくても、過去を変えちゃったからそのせいだ!
………もしかしたらゴールドラスやクロノームの時間転移
に巻き込まれて………

アレ………でも、それじゃあ、やっぱり、だけど、それなら、
それでも、そんな、いや、そうかもしれない、だから、どうして、そん
なはずは、

ブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツブツ
………

「あ、あの………大丈夫ですか？」

「ごめんなさいツツ!!!」

「え!?!………どうしたのですか？」

「俺のせいで………俺のせいで貴方を現代に呼び込んでしまった
………歴史を捻じ曲げてしまった………『危ないツツ!!』
あ?!?!」

ズガアンツ!!

グレイファイアさんに謝罪していると、何処となく攻撃が飛んでき
た。グレイファイアさんのおかげで助かった、ありがとうございます。

だけど………お姫様抱っこは止めて欲しかった。／／／／／

上を見ると、知らない男が立っていた。

「誰だ!!」

「おまん、その女をよこせや、そいつ『グレイファイア・ルキフグス』やろ? まさかわいと同じ奴がおんねんなんてな」

俺と同じ? まさかこいつも転生者なのか!!

「わいの名前は『小崎 航』、おまんと同じ転生者や!!」

「まさか、他にもいたなんて……………」

「その台詞、その格好で言われても説得力ないで」

そうだった……………お姫様抱っこされてたんだ……………泣いてなんかないやい!!

「グレイファイアさん!! あいつは俺が相手します!! グレイファイアさんは隠れてて!!」

神器『無限の武器創造』で作り出した銃を構える。

この銃の名前は、トライガーショット、『ウルトラマンメビウス』で対怪獣用戦闘部隊『GUY'S』専用武器で、3つのモードにチェンジして攻撃することができる。

バクンツツ!! バクンツツ!!

ビームモードにして小崎に向けて放つ、小崎は華麗な身のこなしでそれを避けて、神器を展開してくる。

「わいの神器は一味違うで!!」

魔剣創造ソードパース、彼の持つ神器は魔剣を作り出す魔剣創造である。

彼が作り出した魔剣は魔剣ではなかった。いや、魔剣ではあるが元になった剣は魔剣では無い。

干渉・莫耶、中国に伝わる夫婦剣である。

「ほな行くで!!そらそら!!」

トライガーショットのビームを干渉・莫耶で斬り裂きながら進んでくる。壊れてもまた新しい剣を作り出しこちらとしては分が悪い。接近戦に持ち込むまいと距離を取るが

向こうも距離を取られまいと、剣を投げつけ爆破させて攻撃してくるが、頭の上に乗っているイフが攻撃から守ってくれる。更にイフは、その攻撃を覚え、剣を作り出し射出、爆破させる。

無敵に見えるが、守りきれない場所もある。

(なら、接近される前に倒す!!)

持っていた武器をトライガーショットからメテオールショットに切り替える。

メテオールショット、本来GUY'Sメットと呼ばれるヘルメットを通して脳波を受信、敵の位置を特定し追尾する事の出来る銃である。

だが、これにはGUY'Sメットを必要とせず、生みの親であるレオナルドしか、使うことができない。

ギユ、とグリップを握り後ろにメモリーズディスプレイをセットする、ある程度の距離になったら、銃口より3発同時に放つ事の出来る『アメイジング・トリプル』を放ち回避不能にする、もし倒せなくともその隙に逃げることで出て出来る。

そして、引き金を引いた。追尾機能のある3つのレーザーが小崎に向かい命中する。

黒い煙が立ち上る、この隙に、逃げようと走るが、突如結界で覆われた。

「逃がさへんで、わいに傷を付けた事、褒めちやるて、せやけど詰めが甘かったな」

小崎専用の禁手『アナザーアンリミテッド・ブレードワークス赤き鷹作に憧れた世界』を発動した。

「その白っこいには退場してもらおうで」

イフだけに小型の結界が張られてしまった。これではイフを救出しようにも時間がかかり邪魔されて助けられない!!

イフ自身も結界を覚えて発動しているため、向こうもイフを攻撃できない、いやイフに攻撃自体できない。

「くそ!!こうなったらやるしか無い!!」

メテオールショットを消して、新たに武器を作り出す。腕に巻きついた万能武器『ナイトブレス』に『ナイトブレード』を差し込んだ。

レオナルドの体を蒼い鎧が覆う、顔は惑星アープの復讐と勇者2つの意味を持つ蒼き鎧『アープギア』を身に纏い、その顔は仮面で隠されている。身長も若干伸びたその姿はもはや騎士。名付けるとするならば、

『アーマード・ツルギ剣の鎧』

「本当の戦いは、ここからだ!!」

出会いの鎧

剣にまみれた公園、そこに相對する2つの存在。1つは赤き衣を纏いし英雄贗作の偽物、もう1つは何もかも失くした光の中で復讐を誓い復讐を断ち切りそして、勇者となった1人の青き光の戦士の志を継ぐ者。

「ほう、姿が変わっただけやなく、身長も声も変わつとるやないか」

レオナルドは右腕に装着されたナイトビームブレードを展開する。光の刃が煌びやかに輝く、剣を展開すると共に向こうも剣を作り出し走り出す。白と黒と金色の閃光が走り抜ける。ナイトビームブレードの刃先にエネルギーが溜まる。向こうも弓を作り出し不恰好な矢を引く、放たれた矢と斬撃ナイトブレードショットがぶつかり合い魔力を撒き散らしながら消滅する。

接近すると剣と剣が、遠距離だと矢と斬撃が、それぞれの力がぶつかる。

「なんや？ 魔力反応やて？ 一体誰やねん？」

小崎はこちらに轉移してくる存在に気付き、離れる。

赤い魔法陣と共にリアスグレモリー率いるオカルト研究部が現れた。

「今すぐ戦いを中止しなさい……………ってグレイファイア!!なんで此処に?!!」

「ほお、わいに指図するとは生意気やな」

小崎は轉移してきたリアスグレモリー達に作り出した無数の剣を

射出する。

彼女達はいきなりの不意打ちに目をつむってしまふ。だが、いつまで経っても衝撃が来ないことに目を開けると、

「ぐあああああ!!!ぐッ!!……………」

青い鎧を纏った男がその攻撃を代わりに全て受けていた。容赦なく降り注ぐ剣の雨に鎧を纏っていたとしても殺せない衝撃が彼を襲う。

「おいおい、おまんは馬鹿か?なにこいつらの為に身を張る必要なんて無いんやで」

攻撃がやんだ時には彼は膝をついている。だが、彼の目の炎はまだ消えちやいない。

(奴が慢心した今だ!!)

ナイトビームブレイドで小崎の腕を斬る。飛び散った鮮血が花火の様躍り出る。

「ギヤアアアアツツ!!わいの腕がアアアアアアアアツツ!!」

すかさず、右腕を天に上げ拳を作り胸に当てるその腕に左腕を添えてクルツ、と反転させ十字に組む。

闇を斬り裂く光『ナイトシユート』が炸裂する。

小崎はそのままナイトシユートに飲み込まれ爆発四散する。

「貴方は……………一体……………」

リアスグレモリーはそんな疑問を投げかけた。その時、突如として空が割れた。中には傘を差した少女、否、怪獣娘バキシムが座っていた。

「おーい、マスター!!早く帰ろー!!」

彼は振り返り、彼女達を見ると、

「俺は……………『ハンターナイト ツルギ』、又の名を『アン
ノウンハンド』」

そう言つて彼は空の裂け目に飛び上がるが、突如グレイファイアが叫ぶ。

「待つてください!!私も……………私も一緒に連れて行ってください!!」

グレイファイアは周りの制止を振り切り、空の裂け目へと飛び上がる。頭にイフを乗せて、

ツルギは伸ばされたその手を……………掴んだ。

リアス達は翼を出し、飛んできたがリアス達はその場所に辿り着く頃には、砕けた空間の破片がパズルのピースを埋めるかの様に亜空間の穴を塞いだ。

どうしよう（――；）彼女、グレイファイア・ルキフグスは『有り得た世界』つまり、ifの世界の住人だ。彼女の世界では彼女は死んだ。戦時中、冥界に現れた闇の存在によって滅ぼされた。彼女は命を投げ捨ててまで助けたかった姉に殺されたと言う。

「だけど、私は後悔なんてしてません。そのお陰で貴方様に出逢えたのですから」

ハワワワ、天使や大天使がおるで。悪魔だけど、……………うう、なんか目から汗が出てきたよ。

こうして、新しい仲間の原作キャラ『グレイファイア・ルキフグスif世界版（これからはグレイファイアFと呼称）が仲間になった。

「おらおら、新入り!!早く茶を持ってこい」

なんか無駄に威張っているガッツ星人ガラムとお茶を運ぶグレイファイアF、そして、イフの頭を撫でるレオナルド。その横で涎を垂らしながら羨ましそうな目でこちらを見つめるゴモラがいた、可愛い。後、ガタノゾーアには思いつきりお仕置きしないといけない。

戦闘校舎のフェニックス 閉ざされたレーティングゲーム

物凄い嫌そうな顔をしているゴモラについて、

「ちよつと、ゴモラ？何があつたの？」

僕はおもむろに、そして断固たる覚悟を持ってゴモラに話を聞いた。いや、話は聞かなくてもわかる、何故なら何故ならそれは、

レッドファイツツ
!!!!!!!

赤い帽子のようなものを被った少女『レッドマン』である。

レッドマン

赤い通り魔とも呼ばれ、通りかかる何の罪も無い怪獣を殺し、更に既に死んでいるとわかる怪獣に槍を突き刺したり崖から落としたりと死者に鞭打つ行為を清々しくやってのける惨殺戦士である。

最初は軽い気持ちだった。もしもヒーローが作れたら、と甘い考えで創ってみたら、赤い通り魔が現れた。

ごめんね、ちゃんとお話はしておくから、そんなに怯えないで

「ちよつと!!ライザー貴方ツ!!」

「クソツ!!なんなんだよツ!!」

リアス・グレモリーの婚儀をかけた決闘で、ライザー・フェニックスは人間界で見つけた少し小太りの少女、彼女を誘拐しその能力を使いレーティングゲームの切り札としようとしたが、少女は恐怖で能力を暴走させレーティングゲームの空間を歪めてしまった。

更に、多くの魔物がねじ曲がった空間を通ってやって来ている。

「どうするんですかツ!!部長ツ!!」

魔物に囲まれ、身動きが取れなくなったグレモリー眷属とライザー、外部との連絡も取れず

「あの女の子をどうにかしなくちゃいけないわね」

泣く少女を泣きやませようと魔物たちを蹴散らして少女の元へと向かう。だが、空間を捻じ曲げられ思うようにたどり着けない

しかも、召喚される魔物は上級悪魔でも手を焼く程の強い魔物ばかりだ。

例えライザーが不死身であったとしても、体力を削られいずれは倒れるであろう。

場合によっては最強の能力を持つ存在、『四次元怪獣 ブルトン』

「ヒック……………うつく……………ふえええええん
……………ヒック……………ヒック……………」

／／／／

ライザーをゴミを見るような目で見るグレモリー眷属、犯罪者野郎にかけける慈悲は無い。

「最低ね」

「社会のゴミですわ」

「……………2度と私の目の前に姿を見せないでください」

「ライザー君、上級悪魔失格だね」

「えと、あの、死ねば良いと思います」

「ライザーてめえ!! あんな可愛い子を誘拐するなんて!! なんて羨ましい!! ……イツセー先輩、2度と喋らないでくださいこの豚野郎」ガバアツ!!!」

言いたい放題に言われ、少し涙目のライザー。だが、現実是非情である。

ガオオオオツツ!!!

鳥型魔物の爪がライザーを襲う、ライザーだけ滅多打ちにされリンチにされてしまう。

しかもなんという事だろう、歪んだ空間からミサイルが飛んできた、そのミサイルは全てライザーに直撃しライザーをボロボロにする。

「ちくしょうツツ!! ガキがツツ!! ぶっ殺してやる!!!!」

ライザーは炎をブルトンに向けて放つが炎はブルトンに当たる寸

前で、歪んだ空間の中に吸い込まれてしまう。そして、その炎はグレモリー眷属の戦車小猫に当たる。

『リアス・グレモリー様の戦車、リタイア』

小猫は強制的に転送されてしまう。しかも、その転送先はブルトンによって何処か別の場所へと変えられてしまっている。

「小猫ツ!!ライザー貴方!!よくも小猫を!!」

文句を言おうにも、歪む空間からの悪意なき攻撃に、晒され騎士、僧侶とやられていく。

一方、魔王たちの方でも、リアス達の救出に力を入れていた。

「どうだ、アジュカ」

「駄目だな、あの娘の空間支配能力は超越者並みの力を持っている。今の私達には彼女を止める事は出来ない。それに、中へ入れたとしても空間の歪みで見ている風景とは異なる空間に放り出されるかもしれない。攻撃にしたって、空間を歪めて別の場所へと攻撃を誘発されてしまっっては、彼女にダメージすら与えられない、しかも僕達もその異空間に閉じ込められてしまっていたんじゃ、手の打ちようが無いよ」

アジエカの力『覇軍の方程式』ですら通用しない異空間に閉じ込められた彼らもまた、同じ鳥かごの中の鳥であった。

「んじや、今からブルトン救出に向かいますか」

一方、人間界では、ブルトン救出の為に選ばれた精鋭が動き出していた。

出撃!!ブルトーンキューシューツ作戦

前回のあらすじ

悪魔 ライザーフェニックスに攫われたブルトンを助ける為、
結成された特別チームが冥界に向かった。

他のみんながリタイアしてしまい、俺ことイツセー、リアス、朱乃さん、木場、ライザーが残された。ライザーは既にリタイア寸前だけど、

「どうしましょう部長、彼女に近づけませんよ」

「そうね……………でも、どうにかしないと、お兄様も助けに来てくれるはずだし」

愚か、サーゼクス達ですら身動きが取れないでいるのに。

バギインツ!!

ガラスが割れた様な音が聞こえたと思ったら、空に穴が空いた。アレはバキシムが空間を破った時にでる4次元空間、という事は、エドさんの仲間が助けに来てくれたのかツ!!?

「おーい!!ブルトーン!!どこだー!!」

全く、ブルトンの奴……………遠出するなら一言言ってくれればいいのに、おーいブルトーンどこー!!

魔物の軍団が押し寄せてくる。ブルトンが呼び出した物だろう。今回は、ブルトン救出ともう一つ事情がある。

新たな新兵器の稼働テストの為である。

「……………シャワツ!!!」

腕のリングを掲げると装甲が出現し、それが体に装着されていく。

ウルトラマン型次世代試作強化装甲スーツ

通称……………『ベリアル』

『行くぜ、全部ぶっ壊してやる』

ギガバトルナイザーを取り出し、魔物を攻撃する。ギガバトルナイザーの先端から高エネルギー弾を発射しながら殴りつける。

一撃で粉碎される魔物達、更にエネルギーウィップを出現させ、周りの魔物を一掃する。更に追い打ちとばかりにベリアルジエナサンダーを巨大なドラゴンに向けて放つ。そして、爆発四散するとともに辺り一帯を更地にしてしまった。

ベリアルに変身したった数分で殲滅された。

『……………これが、『ベリアル』の性能か……………しかもまだこの先があるなんて』

ベリアルの性能結果　　予想以上、たった一撃で化け物を倒せる攻撃力、人外を凌駕する程のスピード、強固な装甲、全てを元のウルトラマン型強化スーツを上回っている。

更には、このスーツの使用により、他の怪獣の力を最大限にパワーアップできる。

以上の事からベリアルの性能は最高のもとなり、これからの戦闘データを使い更に強化すれば超越者や無限の龍神、はたまた黙示録の獣すらも凌駕できる力を会得できるだろう。

我々はその力の事をこう呼ぼう、

『カイザーベリアル』と、

そして、その力を我が主が手に入れた時、世界は我が主の力にひれ伏すであろう。しかし、我が主がそれを望まぬことも検討はつく。

世界を支配しなくとも我が主は偉大であるという事に変わりはないと、記しておこう。

愛すべき主へ捧ぐ

ヤプールの研究日誌

同時刻、レーティングゲーム会場、西方面

「マスターが試作型スーツを使った様です」

鳥の様な美しい姿をした女性『マガバツサー』がそう告げる。

「うくん、じゃあ〜あ〜思いつきり〜暴れても〜いいんだよね〜」

魚の様な女性『マガジャツパー』が言う

「では、ミッションを開始します」

鋼鉄の龍の様な女性『マガグランドキング』が構える。

「全てを燃やし尽くしてやる」

炎の化身のような女性『マガパンドン』が炎を体に纏わせる。

「……………ゼットン」

魔王の力を手に入れたゼットン『マガゼットン』

「どうします？お母様」

「マミー!!」

「イエス・マイ・マザー」

「母上!!」

「あんた達!!決まってるだろ、……………思う
存分暴れてきなッ!!!」

オカン、もとい最強の魔王獣『ママオロチ』……………いや『マガオロ
チ』、全てを滅ぼす最強最悪の怪獣が降臨した。

あれ？これブルトンの救出だよね？

黒き王の覚醒

サーゼクス魔王達は驚愕していた。異空間と化したレーティングゲーム会場に突如として現れた黒き戦士、その戦士の恐ろしい程の強さで魔物達を殺していった。

そして、それに便乗して黒き戦士について来た女性達が暴れる。彼らの目的は誘拐された空間を歪める少女だろう。

「災害級の力を持った彼女達にそれを統一する黒き戦士、これがリアアが言っていたアンノウンハンドと言う者達か……………」

圧倒的過ぎる。彼らが敵となれば……………想像しただけで恐ろしい。

「一通りは片付いたな……………?」

周りを見ると、魔法陣が複数展開されていた。そこから禍々しい翼の生えた人達が沢山出てきた。え?何ッ!!?どゆこと??

余談だが、彼らはブルトンが歪めた空間の法則を見つけ、変動して

いない空間を見つけてそこに空間移動して来たのだ。

悪魔達は淡々と言う。

「貴様を殺し、あの女どもを我々、悪魔の物はすれば、悪魔の繁栄は絶対なものとなるッ!!」

「くくく、それに見た目も良い、夜のお楽しみにもしてやれるしな」

独断で勝手に行動する上級悪魔達、手を出すな!と魔王に言われた言いつけを守らず愚かにもこの場へとやって来た。

彼は悪魔達は自分達の私欲の為に大切な家族である彼女達を襲うつもりなのだと理解した、そして、理解と共に怒りが込み上げてきた。そんな事は絶対にさせないッ!!心の中の罪悪感というリミッターが外れる。漆黒のオーラが湧き出て、やがて体全体を飲み込んだ。

全てが真つ暗な世界、漆黒の精神世界でウルトラマンスーツベリアルを来たレオナルドと向かい合う漆黒の巨人『ウルトラマンベリアル』

「あの日、僕が死んだ時、俺の魂の中に入り込んで来た別のものがあつた。そして、前世と性格が変わってしまった。最近じゃ、言葉遣いも荒くなって来てるし、どんな事にも驚かなくなつて来た」

「最初は驚きのせいで感覚がおかしくなつてたと思つてた。だけど、

本当は違っただ、お前が僕の魂と同化した事が原因だった、そして、時が経つにつれて、俺とお前の魂は一つになろうとしている」

「今だって、一人称が僕と俺の中間地点になってしまっている。何故、お前と僕の魂が混ざってしまったかは分からない。そして何故、俺はレオナルドの体に憑依してしまったのか？それも……………」だが、今は時間が無いから単刀直入に言おう

よこせ、お前の全てを……………お前の力も、闇も、復讐心も、全てを」

『クッククック、何処までも強欲だな……………良いだろうくれてやる、俺の全てをなツツ!!!』

僕の、いや俺の体の中にベリアルが入り込んでくる。ズブズブと音を立てながら、俺の細胞の一つ一つが奴と融合していく。自分が別の物に置き換わっていく。不思議と恐怖は無かった。

俺が転生したのも、ベリアルの所為だったのだろうか？そんな事はどうでもよくなった。昔から難しい事を考えるのは嫌いだ。

全てぶっ壊してやる。

オーラの中から、飛び出して来た。ギガバトルナイザーの先端を悪

魔の1人の腹に思いっきり叩き込む。倒れた悪魔の腹を足で踏み潰す。

紫色の髪が悪魔が魔力のスフィアを作り攻撃してくる。他の悪魔も炎や氷を魔力で生成し攻撃してくる。

近くに居た悪魔を盾にして防ぐ、その盾を投げつけギガバトルナイザーを大きく振るう。ベリアルデスサイズのエネルギーの刃が全てを薙ぎ払う。

更に、ベリアルジェノサンダーを天に撃ち、敵に降り注がせた。逃げようとする悪魔はベリアルウィップで拘束し、地面へと叩きつける。

『アメモエらッ!!真面目にやれッ!!……………つもらんぞ』

圧倒的な暴力の嵐に壊滅させられた残った上級貴族の悪魔は恐怖し腰を抜かしていた。

彼はその悪魔の首を掴み持ち上げる。そして、その首の骨を折る。ゴキリッ!!と嫌な音と共に悪魔は死んだ。

この日、黒き王が覚醒した。

脱出ーエスケープー

「ヤプールツ!!……………大変なことになったツ!!」

レオナルドがベリアルと一体化し完全に覚醒した時と同じ頃、レオナルド邸の異空間秘密基地にてウルトラマン型次世代強化装甲スーツ『ベリアル』のデータを取っていた時の事、

「どうしたの?そんなに慌てて」

「これを見てくれ……………」

と言って、見せたのはレオナルドのスーツとのシンクロ率である。通常、彼とスーツのシンクロ率は63.5パーセントと高めの数値である。だが、今のデータではシンクロ率、96.9パーセントオーバーを記録している。

「これはツ!!……………こんな数値はあり得ないツ!!」

この数値は本人とスーツ自体が一体化していると言っても過言ではない。しかも、本人の能力値を上回るデータが送られて来た。映像にもとうてい人間には無理な動きをしながら、敵の悪魔や魔物達を殺していく。

後、それに便乗して勝手に暴れまわる魔王獣達、

「終わったか」

ギガバトルナイザーを肩に体が急激に成長したレオナルドは
あ、と思い出したように

「そういえば、俺たちブルトンを救出に来たんだよな」

俺？俺の一人称は僕じゃなかったか？まあいい、さっさとブルトン
探して帰るか、

と、周りを見渡すと大惨事になっていた。巨大な竜巻に、地割れ、汚
水に火事、クレーターと地獄のような光景だった。

「……………早くブルトンを探してやろう」

「アハハハハハツツツ!!!!全部吹き飛んじやえ!!」

竜巻を起こしながら暴れまわるマガバツサー、その光沢とした顔と
は裏腹に竜巻が全てを切り裂き呑み込む、

(力が、力が湧いてくるわ!!こんな清々しい気分は初めてよ!!最高にハイってやつだわ)

すると突然、マガバツサーの体が光り輝き球体となって何処かへ飛んで行った。

「あひやひやひや!!お水遊び~~~~♪」

辺り一面を臭気が覆いつくし、木々は枯れ果て地面は腐っていく。マガジャツバの体から出る強烈な匂いが全てのものを腐らせていく

「すご〜い♪すご〜い♪なんだかやる気がモリモリ出てくる~~~~♪」

今までで一番強烈な臭気を放とうとしたその時、マガジャツパが光となって消える。

「排除します、我々に刃向かう全ての生命体を排除、排除、排除、排除」

地面を砕きながら、ビームで周りを薙ぎ払っていく。マガグラントキングが歩いたたびに地面が揺れ、大地が盛り上がる。

「全性能の高上を確認、何故我々の力が突然上がったのでしよう」

マガグラントキングの最高最大のビームが放たれようとしたその時、光となって飛んで行く。

「燃える、燃える!!燃えたぎってくるツツツ
!!!!!!」

森も地面も全て赤い炎で焼き尽くされて行く。太陽の化身と化したマガパンドンが焼き尽くそうとする。

「力がみなぎってくるぜ!!燃え尽きろツ!!地球ツ!!」

マガパンドンの熱が更に上がろうとしたその時以下略

「ゼットン……………ピポポポ……………」

辺り一面を更地に変えてマガゼットンは中に飛び上がる。この世界に終止符を打たんと一兆度の火球を放とうとする。

「ゼットン……………ピポポポ……………ゼットン……………」

しかし、放つ前に光となったレオナルドのいる方角へと向かって行く。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラどうしたどうしたどうしたどうしたどうしたどうしたどうしたどうしたどうしたッ!!?」

雷を辺り一面に振らせ、破壊と暴力の嵐を生み出すマガオロチ。身体中から電撃が迸っている。

「これが、私と旦那の愛の力ってやつよ!!愛の力の前に滅びなッ!!」

マガオロチもまた、光となってレオナルドの所へと向かって行く。

やっと、全部回収できたな。さて、

「一緒に帰ろう、な、ブルトン」

そう言うと、空間が歪みそこからブルトンが走って来た。

「うええええん!!!おにーちやあーんツ!!ごわがっだよおお!!」

「よしよし、早く帰ろう。みんな待ってるから」

「うん!!ぐずつ、一緒に帰る!!」

レオナルドはバトルナイザーの中にブルトンをしまい、待機していたバキシムに空間の穴を開けさせこの場から消えた。

俺の絶叫が木霊する。デスシウム光線もビックリのこの威力、膝からガクリ、と崩れ落ちる。円谷プロさん………そこまで追い詰められてしまったのですか？

いや、まあこの作品出来た当時にはこの計画PV見て書き始めましたけど、まさか本当にアニメ化するとは………てつきり東方projectみたいな感じになると思ってた。

ゴタゴタしても仕方ないのでアニメを見ることにした。主人公はアキラ、ミクラス、ウインダムの3人で怪獣の魂が入り込んだ人間が怪獣の魂を使って変身して平和を守るお話らしい。SDキャラなのでギャグ路線なのかなと思って居たらゼットンが出てきたり中々、と言うか本音を言うのと凄く面白かった。

そう言えば、俺はベリアルと融合してるけど俺も怪獣娘の部類に入るのか？いや、男だから怪獣男？怪獣少年？ウルトラマン少年か？

考えるのもめんどくさいからみんなと一緒にウルトラマンを見て楽しんだ。

「エドツ!! 貴方の仲間のおかげでレーティングゲームはめちゃくちゃよッ!!」

リアス・グレモリーはエドに問い詰める。あの後、レーティングゲーム会場は破壊され探索に出た上級悪魔達も行方不明となった。

「滅茶苦茶になった？それは良かったじゃないか、君はあのゲームに人生をかけて居たのだろう？なら、君は助かったと言う訳じゃないか良かった良かった」

エドはにこやかに笑いながら祝福した。それに、と付け足して、

「アレは君らの自業自得じゃないか。ライザーフェニックス、彼が私達の仲間に出向いた悪魔達もさ、彼らが手を出さなければ死なずに済んだものを……………後は、運が悪かったと思っ
てほしい。なんせ出向いたのがあの『魔王獣』達だったのだからね。ま、冥界が滅ぼされ無かっただけ儲け物だと思ってくれたまえ」

無責任な、と言ってももはや後の祭り、起きてしまったものはどうしようもない。

「ああ、それと……………君たちと私達は協力関係だ、決して君たちの仲間ではない、君たちが不穏な行動をとれば我々はすぐに君たちとの協力関係を取りやめる。つまり、君たちを裏切ると言う事さ」

「そんなツツ!!」

「君たちが不穏な行動を取らなければそんな事は無いさ」

と言って、紅茶を飲む。まるで見えない牢獄の中に閉じ込められた気分だ、何故なら彼らは気が向けばすぐさま世界を滅ぼせる程の軍力を持っている。

(さて、彼女達はとう出るのかな？ふふ、この勝負、勝つのは切り札を持つもの)

「ハックシユン、誰かが噂でもしているのか？」

机の中で紅い龍のソフビが怪しく光る。それだけじゃ無い。周りにはそれ以外にもユニコーンや雪男など様々な獣達の人形が怪しく輝いて居た。

真つ白な空間

マズイ……………コレデハ、セカイガ……………イヤ
……………スベテノジゲンガ、キキニサラサレテシマウ
……………
ダガ、イマノワレワレニハ、テヲダスコトガデキナイ
……………カレニ、マカセヨウ……………アラタナ
ル　チカラ　ヲ　アタエル

タノンダゾ、シヨウネンヨ

月光校庭のエクスカリバー
ファーストコンタクト

「イッセー、これから使い魔を捕まえに行くわよ」

「え、使い魔……ですか？」

リアス部長の唐突な言葉から、今回の壮絶な物語は始まった。

「あの、部長使い魔って何ですか？」

「使い魔はね我々、悪魔の代わりに偵察や仕事をしてくれるパートナーのようなものよ」

「分かりやすい風に言えば、ウルトラセブンのカプセル怪獣やウルトラマンメビウスのマケット怪獣みたいなものさ」

エドさんが分かりやすく説明してくれた。

「因みに私の使い魔、では無いが私の可愛い可愛い妹兼ボディガードを紹介しよう」

シュウイツン!!

フォンフォンフォンファン

「……………ピポポポ……………ゼットン」

宇宙恐竜ゼットンだ。

「え、ゼットンさん!!」

「なにイイイイツ!!!ゼットンだとおおお
!!!!!!!」

「ゼットンさん、あの時はありがとうございます。貴女のお陰で助かりました、何とお礼を申し上げればいいのか」

「……………ピポポポ……………気にしないで」

「うおツ!!!ゼットンちゃんが喋った……………だとおおお
!!!」

「なんでエドさんが驚くんですか……………」

トントン、オカ研のドアをノックする音が聞こえた。

「はい、どうぞぞ」

ドアを開けて入って来たのは生徒会長達だった。

「あッ!!あなた方は!!」

「初めまして私は生徒会長、そしてシトリー家次期当主『ソーナシトリー』です」

駒王学園生徒会長 支取 蒼那いやソーナシトリーは眷属を引き連れこのオカルト研究部にやって来た。

「この学園に他にも悪魔がいたなんて……………」

「リアスさん僕たちのことまだ教えてなかったんですか?と言うか、俺たちに気づかないこいつもどうかと思うけど」

「やめなさい匙、私達はお互い干渉しない事しているの。兵藤君が知らなくて当然です」

ソーナ生徒会長が匙を咎める。グレモリーは夜のそしてシトリーは昼の学園をそれぞれが代わり番こで担当している。

「へー、シトリー眷属ね」

こんな時でも優雅を忘れないエドさん。その横で羊羹を食べているゼットンさん。

「……………貴女が噂の」

「どう言う噂かは知らないが、私の名はエド、人間がゼットン星人と呼んでいたものの紛い物さ」

紅茶を置き、自己紹介する。

「そして、こちらがゼットン、私の妹でも有りボディガードさ」

エドさんは生徒会長と話をして握手をした。

「最後に言わせてもらおうが、我々と君たちは協力関係であって仲間では無い。君たちが私達を裏切るような事をすれば、我々は君を消さなければならぬ。その所をご理解いただきたい」

エドは宣戦布告とも取れる言葉と共に少しばかり挑発をかけた。

「なんだとツ!!」

案の定、匙が引つかかった。

「仕方ないさ、我々は仲間になった訳では無いのだからね。むしろ君たち悪魔は要注意しなければならぬのだから仕方がないのだよ。リアスさんのご結婚の話で仲間が1人誘拐されてしまった訳だし」

エドさんは次々と論破していく。俺にはまるで、生徒会長達の足場がどんどん崩されていき最後は崖っぷちに追い詰められていくように見えた。

「ああ、それと君たちが我々に勝とうなどと思わない事だ。今の君たちはゼットン1人で容易に葬れるのだからね」

エドさんの後ろで強烈な殺気を出しているゼットンさん、さすが、ゼットンさんと言うべきだろう、ウルトラマンを殺した実力は伊達じゃないと言う訳だ

「更にゼットンには後、5段階先がある」

何処のフリーザ様だ!!と言いたくなるが実際、ファイヤーゼットン、EXゼットン、ハイパーゼットン、マガゼットン、ゼットン変異種

その他にも様々な強化体が存在する。

「今後とも友好的に行こうじゃないか」

と言ってエドさんは見た事もない機械を取り出し、

「使い魔の森に行くのだろう。なら喧嘩などせず仲良くみんなで行こうじゃないか」

天使のような悪魔の笑顔のエドさんと共に俺たちは光に飲み込まれた。

虹の怪物魔境

気がつくくと、見知らぬ森の中に俺たちは居た。空は紫色で目の前には某携帯獣を使い戦う主人公の様な男が立っている。

「よう、俺の名はザトウージ。使い魔マスターを目指してるんだぜツ!!俺にかかればどんな使い魔も即日ゲット、よろしく」

使い魔ハンターのザトウージさん、彼はエドさんとは知り合いで今回、全員でできる様に手配して貰った様です。

「で、どんな使い魔を要望だい?強いやつ?かつこいいやつ?それも毒を持つてる奴?」

この森は冥界にある森で様々な魔物達が住んでいるらしい。だが、

「最近、この森がおかしくなっちゃってるんだ。行方不明になった魔物達や突然凶暴化する魔物、見たこともねえ魔物まで現れやがる

これも、この森の主、五大龍王の1人、ティアマツトが消えちまっ
てからだ」

ザトウージさんの話ではこの森の主、ティアマツトが突如として行方不明となり、その日からこの森に奇怪な事件が起こる様になった。ザトウージさんの不安をよそに俺たちは使い魔探しに向かう。

ガチバトルするむきむきウンディーネを目撃した俺は夢を一つ壊された。

「お、見ろラミアがいるぜ」

これまたむきむきのラミアが現れた。げっそりする。もう駄目夢を壊さないで、

匙も同じ事を考えて居たらしくげっそりしている。だが、

バグンツ!!

いきなりラミアの姿が消えた。一瞬だった、いきなり消えたのだ。木場は

「今、何かがラミアに襲いかかったんだ。騎士の僕でも捉えられないなんて」

円陣を組んで周りを警戒する。ラミアを一瞬にして消した敵が次は俺たちを狙いかねないからだ。

ガサガサ、

向こう側で何かが動いた。その方向を向く、そしてそいつは出てきた。

灰色の髪の毛をし、帽子を被る少年のような少女、しかし、おかしいのは背中から膜の様な翼が出ている事だ。

じゅるり、と舌舐めずりしてこちらを見てくる。一瞬にして少女が消える。すると後ろの方にいるラミアが少女に掴まれて居た。少女は膜の様な翼を広げ、ラミアをバクリとだべた。

モグモグ、音を立ててラミアを食べる。

俺はその光景に見覚えがあった。

「ボガール……………」

高次元捕食体ボガール、ウルトラマンメビウスにて惑星アープを滅ぼし、サドラ、グドン、ツインテールなどの怪獣を捕食した怪獣。

圧倒的な食欲で全てを食らう、一時期ウルトラマンメビウスですら捕食しようとして居たほど。

しかし、ボガールはニヤリと笑ったきりそこから姿を消した。

そして、ボガールが消えた後、魔物たちが俺たちの事を囲んで居た。ボガールに命令されたのか、その目には恐怖の色が浮かんで居た。

ズドオオンツツツ
!!!!

紫色の雷が降り注いだのは、その後直ぐだった。

「私の実験場にいらっしやい、グレモリー眷属、シトリー眷属」

エド、ちゃんと連れてきたみたいね。さて、彼らのデータを取らせて貰うわ。しかし、こんな所でボガールが現れるなんてくだらないあの子何を考えているのかしら？しかもあの紫色の雷、虚無の娘じゃない。

「何を考えているのかしら？………いいえ、あいつは何も考えて居ないわね。何故なら彼女は虚無なのだから」

ヤプールは席を立つと倉庫の方に足を進めた。倉庫の中には様々な機械が並んで居た。

その中でも異様な白いロボットが立って居た。

「貴方の性能も確かめて見たいしね」

白き正義、歪んだ正義を持ち全てを破壊するまさに宇宙の救世主、

ギヤラクトロン、

絶対の捕食者

紫色の雷、ダークサンダーエナジーの影響により凶暴パワーアップした魔物達が襲いかかってきた。しかも、一体を弱らせるとボガールが突然現れその弱らせた魔物を喰らいまた居なくなる。そして、また新しい魔物を連れてくる。この繰り返しだ。

「リアス!!これではキリがないわッ!!」

ソーナが叫ぶ、だんだんと追い詰められていくグレモリーとシリ、ザトウジさんのビーガ獣がやられてしまった。

ビーガ獣を使い魔ボールなるものに戻す。

「ゼットン、行け」

エドさんの一言で、ゼットンさんは動き出した。ゼットンの圧倒的パワーで殴られた魔物は一撃で粉碎される。

光弾を放てば一瞬にして体を貫通し体内で爆発、ボガールはこれでは自分が食べる事が出来ないと思い、そこから離脱する。

数分してモンスターハウスが治るともう魔獣達はやって来なかった。やはり、ボガールが引き寄せたものだったのだろう。

「……………ねえ、エドさん……………あの怪獣は貴方の仲間なのよね?何故、攻撃してきたの?」

「考えられることは一つ、腹が減っていたのだろう」

「俺たちはあいつの食いもんだって言うのかッッ!!」

イツセーが激怒する。

「我々怪獣達は基本、自由に行動している。好きな時に好きに暴れ好きに食べる。ただ、制約はある。人間には正当防衛以外で攻撃をしてはいけ無い、とな」

まさに手綱の無い暴れ馬、闊歩する暴力、そして、マスターが見て無いた場所では人間には手を出してはいけ無いと言うだけで、悪魔、それも誰も見ていない場所であれば人以外なら手を出しても問題ない。そう言うことだ。

「あいつらはお互いに手を組んで魔物達を襲っていたのだろう。その縄張りに我々が入り込んでしまったのだろう。生命力の強いものに対してボガールが魔物達を率いてダークサンダーエナジーで魔物を強化し戦わせ弱った魔物からボガールが食う、そして、残ったものをグリーザが食らう」

なんて考えられた作戦だろう。一度に大量の食糧を得られ、自分は見ているだけでいいのだから。

「この付近への立ち入りを禁止した方がいい、我々には奴らをどうにかする事は出来ないからな」

ゴ　ワアアアアアツツツツツ！！！！！！
ギヤアアアアア　ンツツツツ！！！！！！
ガアアアアアアアツツツ！！！！！！

突如、叫び声をあげ、三体の見慣れない魔物が現れた。身長2メートルの怪物いな、怪獣が、いや怪獣では無い怪獣を超えた超生物、超獣が現れた。

巨大な緑の蛾の様な超獣 『蛾超獣ドラゴリー』

蟻地獄を生み出す人食い超獣 『大蟻超獣アリブンタ』

凶悪な武器を持つ殺し屋 『殺し屋超獣バラバ』

三体の超獣はある一点を見つめていた。

ふ、ギャラクトロンの実践には少々足りない気もするが、まあ、大丈夫だろう。ん？アレはエドか、……………なら奴らにもギャラクトロンの性能を十分に見せてやろう。やれ、ギャラクトロン！！

空が割れ、中から白い機械の龍が落ちてくる。龍神の様な姿でまる

で救世主の様な存在感を持つソレは、赤い光を放ち起動する。

白き最厄の機械

シベルジャツジメンター
暴走した正義ギヤラクトロン

一瞬だった、その白い機械の龍が目から赤い光線を放つとその光線はアリブンタにあたり、魔法陣の様な模様が現れたかと思うと爆発を起こし粉々に粉碎される。

そして、そのことに気づく前に頭の後ろに付いているアーム、ギヤラクトロンシャフトでバラバを掴み上げ、右腕の手でドラゴリーを掴み、左腕のギヤラクトロンブレードで突き刺し殺す。

一瞬にして、殺される三体の超獣、そして、ギヤラクトロンシャフトを天に掲げ、巨大な魔法陣を展開する。

エネルギーがチャージされて行く。そして、メビウスの輪を多数描きながらそれを一点に集めビームを発射する。

キュイイインツツ!!ビイイイイイツツ!!

放たれた光線は数キロ先を表土へと変えこちらに向き直る。

すると、ギヤラクトロンシャフトがアジアを掴むと耳からコードの様なものを侵入させる。

『この世界の解析は完了した』

アジアから発せられた機械質の声を使い魔の森に響き渡った。

暴走する愛憎

「あれ？なんだコレ？」

目の前に置いてある黒いリング状のアイテム、またヤプールあたりが作ったのだろう。と、予想し隣の説明書を読む。

「えーと、何々、使用方法、ダークリングに怪獣カードを2枚以上読み込ませトリガーを引く事により怪獣を融合させる事ができる、か」

怪獣カードってのはこれか。

《ゼットンツ!!》

《パンドンツ!!》

2つの力!!今一つにツ!!

トリガーを引くと、リングが光り出しその眩しさにダークリングを手放してしまう、光りは突如、空へと舞い上がり消えてしまう。

「な、何だったんだ？ありや??」

そして、数時間前……………

『この世界の解析は完了した。ヤンデレ、監禁、独占欲を理解した。我がマスターの為に邪魔者全てを消す。』

別の世界でもそうして来た様に邪魔者全てを始末する。つまり、この世界のリセットする。

それが我が愛、我が正義』

シビルジャツジメンター・ギヤラクトロンの体が光り輝く、体が縮み、装甲が白いアーマーとなり、頭の後ろのギヤラクトンシヤフトは青いポニーテールの髪となり左目には赤色のバイザーが付けられている。

一見すれば、一人の美しい少女の見えるが、その目には光が灯っておらず、不気味にこちらを見つめている。だが、見られたものは彼女の心が何を考えているかがわかる。

全てを排除する目だ。自分以外の愛を否定し認めようとしな。愛の為なら全人類の抹殺も厭わない。

『ゼットン星人よ、貴様らの事もデータに存在する。マスターを愛する者として貴様らを排除する』

ギヤラクトロンのバイザーが光り輝き、そこから赤い閃光光線が放たれる。ゼットンはバリアーを張り、攻撃を防ごうとするが魔法陣の爆発がバリアーの強度を凌駕し、バリアーが粉碎される。

「……………グッ!!」

すかさず瞬間移動でギヤラクトロンの後ろに周り、パンチを繰り出すがギヤラクトロンはそれすらも予測していたかの様に背中に魔法

陣を貼り攻撃を防ぐ。

振り向きざまにギヤラクトロンブレードを展開させゼットン斬り裂こうとするが、ゼットンはその攻撃を回し蹴りで弾いて振り向く勢いを利用しチョップを叩き込むがギヤラクトロンシャフトによって腕を掴まれ振り回される。

瞬間移動で逃れ、ギヤラクトロンの真上に、火炎エネルギーを胸に貯め、一兆度の火球を放つ、

ギヤラクトロンも負けじとエネルギーをチャージしてギヤラクトロンスパークを放つ、

一進一退の攻防が続いたかに見えたが、僅かにギヤラクトロンスパークの方が上であつたらしく、一兆度の火球が押し負けゼットンもそれに巻き込まれ空中で爆発、ボロボロになり地面に落ちる。

『言つただろう、貴様らのデータは既に持ち合わせていると』

「そんな……………」

リアスが絶望の表情を浮かべる。ゼットンの実力はリアス眷属が1番よく知っている。その後、イツセーの持ってきた昭和ウルトラマンシリーズから平成ウルトラマンシリーズまでを見て勉強した為に、ゼットンさんは間違いなく最強の存在だとわかっている。(この世界ではウルトラマンオーブが放送されていないと言う設定です)

『奇跡でも信じるか？ならばその奇跡すら破壊してやろう。諦めろ、そして認めろ、貴様らは滅ぶしか無いのだ』

誰もが死を覚悟した。リアスも木場も小猫もアシアもソーナも匙も、だが、ゼットン星人エドだけは諦めなかった。両腕を組みニヤ

りと笑顔を浮かべていた。

「いいや、私達の勝ちだ」

そう言った瞬間、光がゼットンに降り注いだ。眩い光の中ゼットンはその姿を変え最強の合体獣となった。

ゼットンとパンドン、そしてマガオロチの力が組み合わさった最強の合体魔王獣、

「ゼットン……………ピポポポ……………キュイインツ!!」

合体魔王獣ゼツパンドン、

「これが、新しい力……………」

「あり得ないツ!!この土壇場で新たな力を手に入れるなんてツ!!?認めないツ!!」

ギャラクトロンはゼツパンドンに向かって閃光光線を放つが、ゼツパンドンが麵をすする様に息を吸うと、そのビームはゼツパンドンの口の中に吸い込まれていく。

「ふー、けふ……………私に光線技は効かない」

ならばツ!!ギャラクトロンブレードを展開しゼツパンドンさんに襲いかかるが、予測を遥かに上回る瞬間移動で躲される。

『ッ!!!』
.....そこだッッ
『!!!!!!』

振り向きざまにギヤラクトロンブレードを突き刺す、だが、ゼツパ
ンドンの高熱がブレードに伝わり腕が焼ける。しかも、ギヤラクトロ
ンブレードが徐々に飲み込まれて行く、早く切り離さなくてはいずれ
奴に吸収されると踏んだギヤラクトロンはギヤラクトロンブレード
を切り離す。

しかし、時すでに遅し、ギヤラクトロンブレードを吸収したゼツパ
ンドンはその威力を自らの攻撃に加算したゼツパンドン撃炎弾を放
つ、ギヤラクトロンは左腕を分離して攻撃しようとした矢先にゼツパ
ンドン撃炎弾を放たれたので仕方なく分離した残りの右腕でガード
した。

直撃した右腕は粉々に破壊され跡形もなく蒸発した。そして、その
煙に隠れてギヤラクトロンの後ろに回り込み、ギヤラクトロンシャフ
トを引っ張った、体を足で固定しギヤラクトロンシャフトを引き千切
ろうとする、実際はギヤラクトロンシャフトがポニーテールになつて
いる為、そのポニーテールを引き千切ろうとしている様にしか見えな
い。

ブチブチブチッッ!!!ギヤラクトロンシャフト兼ギヤラクトロン
のポニーテールが嫌な音を立てて引き千切られる。

そして、ゼツパンドンは引き千切ったギヤラクトロンシャフトで
ギヤラクトロンを滅多打ちにする。

イツセーと匙は、その光景を見て、

「うわー、怖えええッ!!」

女の泥沼の様な戦いに恐怖していた。

奪われた聖剣《エクスカリバー》

駒王学園旧校舎『オカルト研究部』にて、教会より派遣された3人の少女達がやってきた。

「教会から聖剣エクスカリバーが盗まれた。犯人は墮天使幹部コカビエルだ。我々はエクスカリバー奪還の為、この街に訪れ、君たちの許可を貰いに来た。言っておくが我々は君たち悪魔の力を借りるつもりは更々無い事をご理解頂こう」

「つまり、我々は手を出すな、と言いたい訳ね」

「そうだ『まで、ゼノヴィア』……………何でしょうか？キリエさん」

扉にもたれかかる、白い異形のフードを被った少女がゼノヴィアと呼ばれる少女の言葉を制止する。

「どの道、こいつらとは嫌でも協力する事になるだろう」

「?どう言う事でしょうか？まさかキリエさんは我々が負けるとでも思っておられるのですか？」

「ああ、そうだ……………貴様らでは勝てない、グレモリー眷属、貴様らでも勝つ事は出来ないだろうな」

「何故ですツ!!私達にはエクスカリバーがあるんですよツ!!」

「そのエクスカリバーを向こうも持っているんだ、しかもそのうち4本が向こうに渡ってしまっているのだ、戦力の差は歴然だろう。そんな事すらわからないのか」

指パツチンをすると指先に小さな炎が出る。その炎は聖なる力を発している、悪魔には見るだけで背筋に寒気が走る。

「だから、私が殺る………私の腕が疼くのだよ、邪悪なるものを燃やし尽くせとな………邪魔をするなら貴様らから燃やし尽くす」

「それに、力を借りると言っても貴様らの力を借りるわけでは無い。周りに被害が出ない様にして貰うだけだ、貴様らも街に被害は出したく無いだろ」

そう言つてキリエは立ち去つて行く。何とも後味の悪い言葉と共に、

とあるライブ会場にて、

ギユウイイイイン!!ジャーーンツ!!ギユオオオオンツ!!

響き渡るギターの音ロックなライブがファン達を魅了する。

「イエエエイツ!!乗ってるカーーーイツ!!へいへーい!!」

超人気バンドアイドルグループ『ノイズ』として世界ライブを行なっている騒音怪獣ノイズラー。因みにベース担当がノイズラーで、ドラム担当は四次元ロボ獣メカギラス、キーボード担当がだだっ子怪獣ザンドリアス

アイドルネームはメカギラスが『ロボ娘』でザンドリアスが『ツンデレラ』だ。

とあるフードファイト店で、

今まさに、この店の最後の食料がこの世から消えた。周りにはフードファイトのベテランの大人や力士達が倒れている。

「……………モグモグ、この程度ですか、残念ですねモグモグ、ごっくん」

名を怪鳥バードン、フードファイトを制した最強の存在として来世に語り継がれる。

「皇帝殿、如何なされましたわさ？」

漆黒のマントを身にまとい同じく黒い仮面を身に付けた女性は満月を見ていた。そこへ現れた青い鎧を身に纏った女性が声をかける。

「なに主の事を思い出してな……………」

「陛下の事でございますか？大丈夫でしょう、彼処には優秀な部下達がいるのだわさ。それに、ゼットンもいるしあの闇の支配者もいる事ですし」

燃え盛る宇宙船『ダークネスファイア』は太平洋を突っ切って今、まさに日本に向かって居た。

「案ずる事はございませんだわさ。なにせ貴女様は暗黒の支配者『エンペラ星人』様なのだから、そして、主殿は我々を創造し家族として招いて下さった大いなるお方なのですから」

エンペラ星人、ウルトラマンメビウスに出てきた最強最終の敵。彼女もまた、何の因果か前世の記憶を有して居た。

メビウスに倒されて、そして気がつくところの世界に生まれて居た。

「我も守る者を見つけたぞ、ウルトラマン共よ」

とある時空の狭間にて、

キュピイン、システム ノ 再起動 ヲ 確認

目的 ノ 再確認 全生命 ノ 抹殺

コード 起動 出力 システム 共ニ 異
常 ナシ

有機生命体 ノ 存在 ヲ 確認 たいよう

けい系第三番惑星 地球
コード名『バスターズ』

だけで殺意が湧いてくる。

だから、僕は悪魔に魂をうつた

夢を見た。雪の山の中を傷だらけになりながら逃げる、追いつかれる、捕まれば死より恐ろしい事になる。

前には光が見える見ているだけで暖かく為ってくる光が、僕はそれを追いかけてそれを目指して闇から逃げ出す。

ついにその光の下にたどり着いた。そして光の中から美しい女性が現れた。それは女神のような微笑みで僕を見つめていた。

つー、と僕の目から涙が流れてくる。僕はされるがまま、女神様に抱きしめられた。

「今日ね、聖剣を見つけたんだ」

カチャカチャ、お皿の上のステーキをナイフで切りながら、楽しそうに話す。

「ようやく見つける事が出来たよ」

切ったステーキをフォークで口に入れる。

「もぐもぐ、ようやくみんなの仇を打つ事ができるよ」

「みんなそんな顔しないでよ、あの時みたいにみんなで生き抜いたじゃないか」

「聖剣を壊して、みんなでまた一緒に楽しく生きよう。リアス部長だって歓迎してくれるよ」

「それじゃあ行ってくるよ、今日こそあの忌々しき聖剣を僕の手で破壊してくるよ」

楽しそうに笑顔で笑っているね。友達と一緒に笑顔で普通の幸せ

な家族の団欒、

……………のように彼には見えていた、

部屋は荒れ果て、壁には無数の傷や血がべっとりつくついていた。テーブルの上には割れた皿や何も乗っていない皿が置いてあるだけ。

椅子に座っているのは人ではない、グロテスクな姿形をした異形の実体達、クトゥルフ神話に出てくるようなものばかりであった。

「おんやー？ちみはーあーくまさんではありませんか」

白髪頭の長髪神父が剣を持ちながらこちらを振り向く。

「やあ、君がフリード・セルゼン君だね、君の持っている聖剣『エクスカリバー』は破壊させてもらおうよ」

僕は一般の刀を取り出す。それは僕の持つ魔剣創造で創り出した剣ではない、鋭く美しい日本刀、それはまるで誰かの命を欲しがるように怪しく輝く

「これはね、妖刀なんだその名も妖刀『蛇心剣』、闇を吸い取り、あらゆるものを斬り裂くエクスカリバーに匹敵する刀なんだよ」

「へー、刀なんて乙じゃないですか？まー僕ちんも刀を持つてる奴には恨みがあるんですがね」

ザムシャーの事だろうが今は置いておこう。

ガキインツ!!! 気がつけば2人は鏢迫り合いをしていた、キリキリと金属の擦れる音が闇夜に響く。

「エクスカリバーラピッドのスピードについてこれるなんてやるじゃないっすか」

「この程度かい？そんな筈がないだろ？本気できなよ、じゃないと、君……………死んじやうよ」

赤いオーラが体から溢れ出てくる。刹那、フリードは殺気を感じその場に伏せる。

フリードの後ろにあった電柱が音も無く崩れ落ちる。そうだその背後には鬼がいた。

赤い真紅の鬼が刀を抜刀していたのだ。

「僕と、この紅蓮鬼で君の首とその剣を破壊するんだ」

雲の隙間から覗いた三日月は、紅く輝いていた

キャラ設定（ネタバレ有りかも）

名前レオナルド

性別 男

転生者であり憑依者である。元々は出世できない冴えない刑事である。神器である魔獣創造はベリアルと魂が一体化した彼に十分馴染むようでこの世界のキガバトルナイザー＝魔獣創造と言っても過言では無い存在になった。

ベリアルと本格的な融合を果たし身体が急激に成長して青年の姿へと変わった。その後、ふつうに怪獣娘達と日常生活をエンジョイしている。

元々は一般人なので原作とはあまり関わらないようにしていたのだが、なんの因果か、世界は彼を原作に関わらせようとする。しかも、彼の知らないところで怪獣たちが自分勝手にしているため、少なからずその影響も受けてしまっている。

しかも、怪獣たちはレオンを溺愛しているので自分たちの悪事や行動を本人に知らせず、逆に本人に迷惑のかわらないようになおかつ自由に行動するために、情報管理局まで支配しているとかいないとか。

戦闘力

戦闘力は昔は一誠にも劣っていたが、今は魔王に匹敵する強さを持っている。さらに言えば、更にも上の段階が存在するわけでこれから先、もっと強くなる可能性がある。

しかし、レオンの闘争本能は極端に低いため、日常ではあまり戦闘を好まない。だが、一度火がつけばそこからはベリアルさんリスベクト並みに暴言を吐きまくる。

上記に説明したように、オリ主は決して戦闘好きでもなければ原作崩壊者でも無い。

ただ、世界のサイクルとアホな事をしでかす怪獣達に巻き込まれているに過ぎなかったのだまる。

グレイファイア（異世界）

ガタノゾーアの歴史改変の影響で世界が滅びてしまったパラレルワールドからやってきたグレイファイア。

原作のグレイファイアとは異なり、時間と空間を飛んできた為、少し若い。あと不遇。最近出番がないと愚痴るがせつせとメイド稼業を頑張っている。

ごめんなさい、ちゃんと出番をあげなくて。

ゼットンさん

最近、出番が多いゼットンさん。ウルトラマンを倒した実力のせいかオリ主より主人公主人公している。もうゼットンさん主人公でいいんじゃない？

と、冗談はこれぐらいにして、アースアを助けギャラクトロンを退けたゼットンさんは原作どうり、テレポーテーションと火球、光弾で最強の座に君臨。

マガ一家との共闘でもマガの力を得てマガゼットンに変身、更にまだ4段階も変身を残している。

魔王に引けを取らないほどの戦闘力を持ち、その本気は本気のサーゼクスと互角はそれ以上、

この世界で一番、グレートレットに高い存在かもしれない。(まあ、通常の姿での話だが)

イフちゃん

いつもレオンの頭の上に乗っている。今でもよく頭の上に乗っかる。ぷにぷにしてお餅みたいで可愛い。

(私も現実世界でぷにぷにしたい!!)

ギヤラクトロン

ヤンデレ、やばい子今後の登場に期待しよう。

ヤプールさん

実験のためには他の犠牲（オリ主には迷惑をかけないように）を厭わない冷酷無比。

復讐の一太刀

ガキイインツ!!!ガキイインツ!!!ズバツ!!!

真夜中に響く鏝迫り合いの音。しかし押されているのはフリードの方で木場は邪心剣と紅蓮騎のダブルアタックでゴリ押してくる。しかも、フリードの邪悪な心を吸って更に威力と斬れ味を増して行く。

「あははは!!どうしたんだい?そんなんじや僕をいつまで立っても殺せないよ♪」

もしも木場のファンが彼を見たとしても、人は声を揃えてきつとこう言うだろう、

彼は人間じゃ無い。

その笑顔は人間の狂気をこれでもかど鍋にぶち込んで何時間もグツグツと煮込んだもの、そんな笑顔だった。

「くらいな、邪心剣!!三月斬波!!!」

邪心剣かは放たれた斬撃がマンションの壁に三日月の傷を作り出した。

「嘘でしょ!!まーじなんすかツ!!?ありゃーヤバいつすわ……………」
てなわけでバイチャー」

フリードは閃光弾を撃って目くらまししそのスキに逃げ出す。

「ち、逃げたか……………まあいいさ、次に会った時、聖剣と共に葬ってあげるよ、クハハ、アハハハハハ♪」

「頼みがある、エクスカリバーの破壊を協力させてくれ!!」

イツセーと小猫、匙は教会の聖剣使いにエクスカリバー奪還あるいは破壊の協力を申し出た。

「いいだろう、ただし正体がバレないようにしろよ」

それが条件だった。

「そう言えばあのエーじゃねえ、あのフードを被ったあの人はどうしたんだ?」

「ああ、キリエさんなら、この近くの実家に帰っているよ」

へー、あのエロい格好の厨二病なキリエさんが昔、住んでたんだ。あー知り合っとならばよかった!!

「我が主よ!! 貴殿と出会えぬ長き時の中、私は永遠の牢獄に閉じ込められていた。だが!! 今、出会うことのできた奇跡!! そして私にどうか安らかな祝福を!!! (マスターに会えなくて本当に寂しかったです。でもようやく会えました、だからいっぱい頭ナデナデしてください)」

厨二病が爆発したか……………キリエロイドが帰ってきたから豪華な料理を作ろうと思って席を立った瞬間、キリエロイドが抱きついてきた。全く、これからご飯だから、ちよつと待っててね。

「マスター料理は私が作るから、マスターはジャツパとキリエロイドの相手をしてて」

ごめんね、マガオロチ、いつも任せっきりで、

「いいってことよ……………なんかこうしていると夫婦みたいだな (ゴニョゴニョ)」

なんか最後の方は聞き取れなかったけど、あれ？

「こんなスパークドールズあったっけ？」

足元に見たこともない竜の姿をしたスパークドールズを見つけた。

「なんの怪獣だ？これ」

見たこともないスパークドールズ、またダークルギエルが現地の生物をスパークドールズ化させたのか？

「全くあいつは……………」

ダークルギエルからもらったスパークドールズを実体化させるアイテム『ダークスパーク』を使い実体化させる。

『ダークライブ!!オフィス!!』

ロリ少女　　ガ　　アラワレタ。は？え？どう言うこと？え？え？

「ふえええん!!」

そして泣きながら俺に抱きついてきた。えええええ？え？え？え？え？え？なにどう言うこと!!!?

何が何だかわからないまま、一日中、泣きついてきた幼女？をあやし続けた。

「ほー、フリードよしてその悪魔にやられて逃げ帰ってきた、と言うわけか」

「きー!!次は絶対ぶっコロコロしてやんだかんね!コカビエルの旦那!!」

「ふ、まあいい。その聖剣エクスカリバーと………こいつがあればグレモリー眷属など容易いものだ」

そこには、十字架に磔にされている体にプロテクターをつけられた一体の金と黒のカラーの戦士がそこにいた。

裏切りの刃

「どうしちまったんだよ……………木場あぁッ!!」

イツセー君、君のその悲痛の叫びがもつと聴きたい♪もつと聞かせ
てよ♪♪♪♪♪

「僕はね、魂を売ったんだよ♪『ファウスト』と言う物語を知っている
かい？悪魔に魂を売った男、ファウストと悪魔メフィストが騙し騙し
合うストーリーさ♪彼女はその狂気なる科学者Dr. ファウストの
名を語るまさに真の悪魔たる存在♪そして僕の新たなるお母さんさ
♪」

「ふふふ、それだけじゃない、闇の力をそして真の僕を引き出してくれ
た師匠も今まで僕を支えてくれた友達もいる♪ああ、安心してこの復
讐が終わったらみんな仲良く部活をしよう♪ずっとずっとみんな
で一緒にいられる永遠に寂しくないようにして上げるから♪」

スー、シャキン!!鞘から止まりだした刀の刃は禍々しいオーラを纏
いながら美しく輝いていた。

「アヒヤヒヤヒヤヒヤハヤツ!! 全くもって道化だね♪な、お前もそう思うだろ? ダークファウストさんよ」

本当の邪心剣をもっている魔人、それは邪悪な闇の力を手に入れて光の友に刃を向けた魔人の模造、現し身、マガオロチのような鎧を来た女性

最悪の魔人『無幻魔人ジャグラス・ジャグラ』

そして、その隣にいる赤と銀をメインにした女性、滲み出る闇の力は全ての感情を狂わせる。

『ダークファウスト』

「ふざけないで、この作戦は奴らの目を欺く為のカモフラージュだと言うことを忘れないで」

「あー、そうだな………クッククック、友人の騎士君を探しにはるばる仲間を集めてやって来たのに、肝心の騎士君は既に闇落ち♪暴走した騎士君を止めるために赤き龍は拳を振るう………感動的だ♪ま、無意味だけどね!! いやーここまで本当、苦労したよ♪記憶の改竄をして戀鬼を憑依させてわざわざ邪心剣の模造品までやってな♪」

本当、思い出すだけでも笑いがこみ上げてくるぜwwww。本当に馬鹿だろ、怨み〜? 復讐〜? バツwwww!! バツカじゃねえ〜の!!? さも幸せそうに日常を語ってたけどさ、そんなあるんだったら復讐なんてやんねーっの、

無自覚で言ってるみたいだけども、所詮、お前も道連れを作りたいたいだけなんだよ。」

見下ろす。ふざけた口調も最後には真面目な口ぶりに変わる。

「ん、ジャグラー……そろそろいいでしょう。シトリー達も加勢に来ました。ここで彼女達にゲームオーバーしてもらっては困りません。」

「わかってるよ、しっかしあいづら本当に気づかないんだな。自分たちの仲間が入れ替わってるって事によ」

「仕方ありません、内部通告者を増やす為に誰か1人が犠牲にならないければいけないのですから、しかし心配は要りません。物語は原作どなりにそして、私達の思い通りに動くのですから」

「あーそうだな、マイナスエネルギーの貯蓄も溜まった事だし、『滅亡の邪神』の復活も近いって訳だな♪」

楽しい楽しいよ!!兵藤くん!!もつとだもつと楽しませてくれ!!

「いい加減眼を覚ましなさい!!」

部長く、駄目だよこんな楽しいことを止めるなんてく

ザシユ!!?

……あれ?……僕は……何……してたんだっけ
……おかしいな……目が霞んで……き
ちやつ……た……

「実に勇氣ある戦いだった♪この戦いは人々に受け継がれていくだろう!!我が弟子よ」

ゲスイ笑みを浮かべ邪心剣を舌なめずりしながら、黒い結晶のようなものをもっている。

「お前は誰だツ!!」

叫ぶイツセー、だが、

「命とは儚い……僅かな時の中で夢見る一瞬の灯火、復讐に取り憑かれた衰れた騎士に剣士としての名誉ある死を送ろう、と言う俺の粹な計らいさ♪」

「お前達のおかげで効率よくマイナスエネルギーを抽出できた、見ろよこの結晶を……美しいな〜!! 一体これで何十年分のマイナスエネルギーがてにはいったんだろうなあ。なあ、お前ら想像してみてください!! こいつの復讐心を増幅させて取り出したんだ!! どれだけの憎しみが溢れているか／／／／ああ、見ているだけでうっとりしちまうぜ／／／／」

「なんで……なんでそんな事を!! お前らには無えのかよ!!! 心がツ!! 可哀想だと思わねえのかツ!!? なんで……なんでなんだよツ!!!」

ジャグラーはムカつきながら、

「知らねーな? 俺、怪獣だし〜♪怪獣つてのはな、理不尽が形をもったもんなんだよ。そう言うもんだよ、足元に誰が居ようが容赦なく踏み潰す。その場所に大切なものがあるが無意味に破壊する。それが怪獣つてもんだよ。いや〜でも大変なんだよね〜、マスターに秘密にしながらやらなきゃいけないから」

何も言えなくなる。確かに、我々を助けてくれたものもいれば、仲間を助けようとレーティングゲームを滅茶苦茶にした奴や愛のために襲いかかって来た奴もいた。だが、この、こいつだけは吐き気の催す邪悪、忌むべき悪、

悪魔より悪魔らしい存在、

「俺はこゝでおさらばさせてもらうぜ。そこに倒れてる騎士様、サツサと助けないと大量出血で死ぬかもよ♪じゃあねえ♪ウハwwウハハwwww」

闇の中に消えていくジャグラー、その笑い声はいつまでも闇の中に響くのであった。

狙われた学校

「カラスどもが動き出したか」

優雅に紅茶をすする彼女は誰もが魅了される美しさを秘めていた。ゼットン星人エド、学校の方角からは絶え間なく爆発音が鳴り響く。と言っても張られている結果によって普通の人間はそれを見る事も聞く事も出来ない。

「ゼットンは今、動く事は出来ない。他の実力者達も今はここには居ない」

煌めくその瞳は、まるで待ちかねて居たものがようやくやって来たようなそんな瞳だ。その視線の先、黄金に輝く光を反射させる機械のようにそこに立ち、存在を見せしめる。

「君に頼めるかな？」

「当たり前だ、私を他の雑魚どもと一緒にするな………私は超一流の殺し屋だ」

エースキラ、かつてウルトラ兄弟を磔にしてその力を手に入れた最強の敵の一体、超人、裏世界では知らぬ者なし。

「人の作品を勝手にパシリ扱いさせるとは貴様も偉くなったものだな」

空間の罅、そこから赤い悪魔が降り立った、赤い髪に青い瞳、彼女は異次元人ヤプール、エースキラを作り出した張本人である。

「ヤプール、なぜカラスどもにダーククロスを与えた？しかも、試作型

のタイプ0（ゼロ）を」

「決まっているだろ、実戦データを取る為さ。カラスどものお陰でなかなかいい実戦データが取れたよ………しかし、その程度さ、これ以上のデータは望めないだろうな。今夜あたりに手を切るとしよう」

「ふ、所詮は道具か……慈悲もないとはな」

「何を言っている？あんな下等生物どもなぞ所詮、そこらに落ちている石ころと同じさ、逆に我々の為に利用してやったんだ、光栄に思うだろうよ。」

「……いいか、我らが主はレオナルド様ただ1人だ、主以外の存在が出しやばる事は万死に値するのだ。だが、主は慈悲深い………蝙蝠やカラスにさえ優しさを与える。」

「知っているか？主は今や暗黒の力をまるで手足のように使いこなしている。いずれその闇は我らを導くだろう。ならば、我々がする事は決まっている。主の力を世界へと見せしめる、新たな神としてこの星に君臨させる。我々は主によって救済されるのだ!!」

「主をウルトラマンにするのだ」

「狂っている。他の人間が見れば、いや神だってそう思うだろう。だが、私はそれに共感するよ。マスターがいずれ神になる、私達がマスターを神にする。おかしい事なんて無い。」

「貴様だってその為にゼットンを温存しているのだろうか?」

「ええ、そう、繭はまだ目醒めん」

「マースター!!最近出番がまるつきり無いよー、人気怪獣なのに出版が無いっておかしい!!」

「あー、うるさいわかったよ。今度から出番を作ってあげるから………まあゴモラのメタ発言は置いておいて、ヤプール、この設計図はなんだ?ん?言ってみろ」

とてもいい笑顔だ、とても、

「これは現段階で開発途中の『ビクトリウムキャノン』でございます。我々はこの太陽系調査にあたり、地球のすぐそばに肉眼では観測できない未知の惑星を発見しました。それは純度の高いビクトリウムで生成された惑星で我々はそれを資源として使っております。幸いビクトリウムコアの反応はなくなっただ単にビクトリウムだけの生命が住めない星である為なんの問題もありません」

「いやいや!!問題ありまくりだからッ!!!なんなの!!一体いつから宇宙に進出したの!!?てかなんでビクトリウムキャノン作ってんの!!?この世界破壊すんの!!!」

「主が望むのならばこの世界を滅ぼして見せましょう」

「望んで無いから!!いらぬから!!そんな物騒な兵器!!」

ビクトリウムキャノンの製作は禁止!!世界破壊すんのも駄目!!平和が1番!!ラブ&ピース!!」

「そ、そんな!!ラブだなんて／＼／＼いいえ、主よ我らも愛しております(ボソ)」

この時、ゴモラは思った。ラブコメなら他所でやれ、と

「フハハハ!!起動せよ『ダークロプス』よ!!」

ここは駒王学園、今そこで墮天使コカビエルは最後の切り札を目覚めさせた。その名は『ダークロプス・ゼロ』かつて、皇帝カイザーベリアルが作り出し実験中、行方不明となりサメロ星人によって回収された。

ダークロプスの試作型でありながらウルトラマンゼロを圧倒し死ぬ寸前、惑星を巻き込んだ大爆発を起こし消滅した。

「ダークロプスだがなんだか知らねえが!!ぶっ飛ばしてやるぜ!!」

例え強敵であろうと、俺たちの友情が負ける訳はない!!

ザシユツ!!

ダークロプスは一瞬のうちにコカビエルの胸にダークロプスゼロスラツガーを突き立てる。

「ぎ、貴様……………裏切るかッ……………ゴフ!!」

『元より貴様の下についた覚えなどない。我が主はカイザーベリアル皇帝陛下ただ1人』

コカビエルを始末したダークロプスはまたこちらを振り向き宣戦布告する。

『命という儂いものにすぎる貴様らにこの俺が倒せるか』

地上に降り立つまるで貴様らなど空を飛ばずともいとも容易く葬れると言っているかのように。指をくいくいと折り曲げ挑発する。

「てんめええッ!!舐めやがって!!」

イツセーはダークロプスに殴りかかる。だが、腕で弾く事でいなされる。続けて木場と小猫がコンビネーションで襲いかかるが木場の剣をダークロプスゼロスラツガーで斬り裂き、小猫の腹に蹴りを食らわせる。

『この程度か?この街を守るんじゃ無かったのか?』

「私の眷属をバカにするな!!」

滅びの魔力、そして雷が発生する。その2つはダークロプスに直撃

する。巨大な爆発が起きるがそこにはダークロプスが平然と立っていた。全く効かない傷一つ着いてすらいない。

そのボディはペダニウム鉱石で出来ている、傷は愚か衝撃すらも通らない。

『全く、弱い……弱すぎる、その程度か？ 貴様らの力は………
ならば死ぬがいい』

ダークロプスゼロは空に浮かび上がる。ダークロプスゼロスラッガーを胸につける。ダークロプスゼロの胸が浮かび上がり中からデイメンションコアが出てくる。

デイメンション・ストーム、ダークロプスゼロ最大最強の必殺技、次元を捻じ曲げ全てのものを異次元へと呑み込む。

『この街と共に異次元に沈め』

ガシヤアアアンツツツ
!!!!!!

ダークロプスのデイメンションコアから腕が伸びていた。そして、その腕はデイメンションコアを掴むとそのまま引っこ抜いた。地面に落下するダークロプスの残骸、それをしたのはエースキラーだった。

「任務は達成した。これより帰還する」

「お、おい待てッ!!」

エースキラーは振り返るとまるでゴミを見るような眼で空を見上げる。

「出ている」

エースキラーはそこには武器を向ける。するとそこには白い鎧を身に纏った存在が立っていた。

『まさかあの『エースキラー』と出会えるとはな、超一流の殺し屋、コードネーム『エースキラー』数多の敵を殺し裏世界では知らぬものはないと言われる程の超有名人』

「そんな事はどうでもいい、何故貴様がここに入るのか、と言う事が最優先事項であろう」

『失礼、俺はアザゼルの命令でコカビエルを捕らえろとの事だったが、既に死んだ後だったようだな。それで、何故貴方のような超有名人がこの場所に?』

「貴様に言う必要はない、これより帰還する」

空間を破り、異次元へと帰還する。

コポ……………コポコポ……………

繭はまだ目醒めん、だが滅びの日は近い

心からの願い

コカビエル事件が終わり、束の間の平和が訪れる。今日は授業参観、生徒は絶望の声を上げていた、が我らが主人公は学校にも行けないので家でのんびり怪獣娘達のお守りをやっていました。

「あががががイダダダ潰れる!!シルバゴン!!離せッ!!死ぬ!!死ぬ!!」

「マースター、グガアアアzzzz」

近視のシルバゴンに抱きつかれて骨が折れそうになっている。顔も真っ青だ

「ますたー、遊ぼお♪」

マガジャツパちゃんが遊びにきたよ。あまりの臭さにシルバゴンが気絶した、ある意味最強だな。

「ありがとうマガジャツパ」

頭を撫でてあげる、気持ち良さそうな笑顔を見せるマガジャツパにこっちも笑顔が溢れる。

「おい!!ジャツパ、お前だけズルいぞ!!」

レッドキングさんが後ろから抱きつく。またか!!骨がギシギシ言ってるのじゃ!!

バフ、

赤い煙がレッドキングにかかったと思ったたらいきなり赤顔して逃

げてった。

「ノーバ、助けてくれてありがとう、でもさレッドキングに何を見せたの？」

赤いアサシンみたいな黒肌少女ノーバが立っている。一体いつの間に

と思つてたら赤い煙を俺にかけようとしてきた。避ける!!

「あつぶね!!」

ち、

舌打ちしたよこの子、舌打ちしましたよ!!

あ、気絶した、どうしたノーバってビザーム何してんの？ああ電撃で気絶させたのね。ありがとうビザーム。今度、美味しい電気あげるから。

最近、なんで俺にまで攻撃を仕掛けてくるかな、最近俺なんかしたかな？

「遊ぼ〜ね〜遊ぼ〜よ〜♪」

そうだったジャツパの事待たせちゃってた。よっしゃ、何して遊ぶ？オセロ？トランプ？それともゲーム？

「ジャツパ!!お馬さんごっこやりたい!!」

お馬さんごっこか？なら俺が馬だな!

「お兄ちゃんのお股のお上に乗るんだって、マグナお姉ちゃんが言っ

てた!!」

よし、マグナ、ちょっとつら貸せや………こんな無知で無邪気な娘になんて事教えてやがるぶっ殺すぞ。

『バトルナイザー!!モンスロード!!』

マグマ星人マグナを強制召喚した。ゴゴゴゴゴツツツ!!!
超怒りのオーラを出して半分ベリアル化している、マジギレだ。

「ね〜ね〜、なんでマグナお姉ちゃんは干されてるの?」

「然るべき報いを与えたまでだよ、さ、ジャツパ、みんなも誘って一緒に遊ぼ」

ブルトンやピグモン、ハネジロー達と一緒にちゃんとした健全かつちゃんとした遊びをしました。

遊びの後は訓練をする。ベリアルスーツを装着し腕慣らしをする。まずは素手での戦闘訓練をする。力に自慢のある怪獣を相手に素手で殴る蹴る、しかもこの訓練は1対多数での戦いを目的としている為、途中での乱入は勿論、背後や異次元からの奇襲される事もある。

「たく、なんつー力だよ、我がマスターながらやばいな」

今は、ゴルドラスの超能力と対決している。真正面から殴っても効果が無いと分かるとフェイントを踏まえたカウンター戦法に切り替える。

「あ、ゴルドラスの上半身が地面に埋まった」

犬神家になったゴルドラスを引きずってタンスの中に隠しとく。次はバルタン星人との対決だくノ一とは到底思えない格好をしているバルタン星人バレルとの超科学忍術を駆使し攻撃してくる。

お得意の分身攻撃から白色破壊光線、赤色光線、そして特殊武装『サイクロンソーサー』『サンダーブーメラン』と言った手裏剣型武器を使用する。

厄介なのは彼女一人だけと言うわけでは無い。遠距離よりガッツ星人ガルムの『ホークアイショット』がこちらを狙っている。

まだマグナがいらないだけマシである。マグナの超近距離攻撃とバレルのアサシンスキル、そしてガルムの遠距離攻撃を同時に相手しなければいけないのだから。

「僕の攻撃が全く効かない……………本当に強い」

サイクロンソーサーやサンダーブーメランは全てギガバトルナイザーに弾かれ、分身はギガバトルナイザーを振るう風圧で消される。白色破壊光線や赤色光線は見切られ、ガルムの射撃も分かっているかのように防がれてしまう。

『デスシウム光輪!!』

八つ裂き光輪のような黒い光輪が私の武器を破壊していく。

ブン、

一瞬、一瞬だがノイズのようにベリアル姿が変わった、赤いと銀の姿だった。

ブン、

まただ、また見えた。希望、光、英雄、一瞬だけの姿に自分が思い描いていた全てがそれには詰まっていた。

ウルトラマン、怪獣の敵　我々の忌むべき　そして、倒すべき存在

記憶で理解している、なのに………なのに彼がマスターがウルトラマンだと思うだけで心の底から本能の中から、

それが救世主であるように見える。マスターだけが特別、人々の希望がウルトラマン、

私たちの希望はウルトラマスター

「……………あ、」

思考の海から戻ると目の前には振りかざされたギガバトルナイザーが、

ゴンツ!!

「ごめん!!バレル!!」

頭を地面に擦り付けて謝る俺、いや、バレルならいつつもある程度の攻撃なら避けるか躲すかできたかも知れないんだけど、なんか今日は考え事してみたい。

マジで大事にならなくて良かった。もしこれで記憶障害とか寝たきりとかになったら一生バレルを看病するから。

「バレル、なんでも言ってくれ、俺ができる範囲での事ならなんでもするから」

「なら僕をお姫様抱っこして、それなら許す」

ゴフツ!!

お姫様抱っこ……………難易度高え

な。しかし、なんでもするって言ったんだやるっきゃねえツ!!!

6時間以上お姫様抱っこしてました。誰か助けてください。

「マスター」

「ん、何?バレル」

「なぜマスターは強くなりたいたいんですか?マスターは戦いが嫌いなんだよね、原作介入も嫌だって言ってたし、それなのになんでこんな訓練をしてるの?」

何故って……………決まってるじゃ無いか。

「強くならなきゃ、みんなを守れないじゃ無いか。みんなの強さは知ってるし、並みの相手なら倒せるけど。もし、もしもお前達じゃ手も足も出ないような強い敵が現れた時、俺だけ何も出来ないなんて嫌なんだ……………闇こんな姿の巨人だけど、俺はウルトラマンガイアのような強さとウルトラマンコスモスのような優しき、そしてウルトラマンダイ

ナのような勇気とウルトラマンネクサスのような絆をもって、ウルトラマンメビウスのように困惑しながら、ウルトラマンマックスのように信念を貫き、ウルトラマンギンガやビクトリーのよう冒険し、ウルトラマンエックスのように心を通わせてる、ウルトラマンティガみたいな光の戦士になりたいんだ。

……なんて、理想を並べても意味無いよな。でもいつか、本当にウルトラマンになりたいんだよ………全人類の救世主とかそんな大層なものじゃなくて、お前達の、俺の家族達お前達だけののウルトラマンに」

「三大勢力の和平会議が駒王学園で行われるようです」

そうか、黒い影は笑う。対話しているのは内閣総理大臣、怪獣達は既に主人の知らぬ間に日本を牛耳っていた。彼の方には黒い虫が引っ付いている。

ベゼルフと言われた怪獣で、その毒、傀儡毒は生物を支配し支配された生物は戦い勝つ事でその毒性を強力な元へと変えていく。

「我らの力を見せしめるにはこれ程いい機会は無いだろう。主には映画の撮影とでも言っておこう」

「誰を行かせるのだ？」

「ピグモンとエドを向かわせる。その日、全勢力を駒王学園に集中させ我々の戦力を見せしめるぞ」

（主は駄目だと言うだろうな………争いを好まず、ただ守る為に戦う主は………本当にウルトラマンのようだな、

しかし、これは主を守る為でもあるのだ。誰も主が我々を生み出した存在とは思えない。我らが囿となれば主には危険は無い）

「もうすぐで、我が家へ着くぞ」

暗黒の支配者がレオン家に着くのはもう直ぐだ

停止教室のヴァンパイア みんなの楽園

見えなくい壁に囲まられて♪息が詰まりそう毎日♪

わー!!すごい!!

「第1回、大怪獣カラオケ選手権!!」ドンドン!!パフパフ!!

平和な時間、それは何気ない一時こそそれなのかもしれない。今日は帰って来たアイドル怪獣娘達へのイベントとして開催した企画。歌っているのは我らが主人公、レオンことレオナルド。

「強くなれ♪ヒーローになれ♪」

クライマックスを歌い切ると周りから歓声が飛び回る。何気ないその日常がそこにはあった。

「マスターすごいッ!!!」

笑顔で拍手するゴモラ、

「まあ、貴方にしては上出来なんじゃない……………(すごく綺麗な歌だったわ／／／／／)」

ツンデレな発言をするエレキングさんの妹、放電竜エレキングの『レキ』

「スツゲーー!!いい歌だったぜ!!」

テンションマックスなミクラス

「ふー、久々に歌いまくったぜ」

あー、喉枯れそう………久々に歌ってみてこんな俺の歌で感動してくれて本当に嬉しいよ。

そういやif世界のグレイファイア（第5話、第6話参考）が朝から見えないけどどこ行ったんだ？

「レオン!!もー!!私の話を聞きなさいよ!!」

ザンドリアスがポコポコと殴ってくる、あ、ごめんそこ溝だから痛いから!!やめて!!本当にやめて!!

「ヤプール様、お話したいことがあります」

「おや?第5話、第6話 以降出番が無かったグレイファイアちゃんじゃないか、どうしたんだ」

メタ発言をする異次元と常識にとらわれないヤプールさん、そしてそのヤプールさんに用があるグレイファイアif

「私は、レオナルド様に助けられました……………ですから、私は力が欲しい、レオナルド様を守れる何者にも負けない最強の力が」

「力が欲しい、ならば強くなればいいじゃないか。この世界の君も努力して強くなったじゃないか」

「今の力だけじゃ限界があります、私は力を得る為になら悪魔にも命を捧げます」

「オーケー!!その言葉が聞きたかった……………君を強^{改造}くしてやろう。私の頭脳でな」

「ロワ、グリゴリの方はどうだ?」

「御安心下さい、白龍皇共々、しっかりと管理しております」

灼熱の用心棒ことシユヴァルツ・ロワは徹底した管理でグリゴリとあのヴァーリを手中に収めている。鬼のような顔でヴァーリを虐めぬく化け物、

命令は絶対にこなし、敵を焼き尽くすその姿はまさに怪物。

(あと数日でこの任務ともお別れですか、早くマスターの顔が見たいです)

その正体は、主マスターの為に(独断で)グリゴリに潜入した用心棒怪獣『ブラックキング』であった。

「帰ったぞ、我が主よ」

「ああ、お帰り、エンペラ星人」

ダークネスファイアが帰還した。ダークネスファイアでの長旅ご苦労様でした。ザンドリアス達と一緒になっちゃうけど今夜は豪華にすき焼きにするぞく!!

「主よ、我はこの旅の中、人肌が恋しかった所だ、思い切り抱きしめてくれぬか」

イケメン過ぎだろ、エンペラさん

「ああ、いいよ」

腕を広げるエンペラをぎゅ、と抱きしめてあげる。心の暖かさが伝わってくる。本当に闇の支配者とは思えない程、彼女の心は暖かかった。

「暖かいな、主の心は……………」

レオンからは見えないその顔には涙が流れていた。闇の中1人で光を求め彷徨い続け、苦しみ続け、そしてついに光を憎んだ1人きりの皇帝が初めて流した涙だった。

『マスター!!ご飯できたよー!ー!!』

あ、ゴモラが呼んでる。うし、じゃ行こうか、飯♪

ガチャ、扉を開けて居間に向かう主の姿を見ながら、彼女、エンペラ星人は見たこともない優しい笑顔を浮かべ

「やはり主を騙すと言うことは辛いな、事実、我は主に幸せになってもらいたい……………」

エンペラ星人の脳裏にはかつての自分自身を思い出していた。

「主よ、我のわがままを許して欲しい……………新たなる皇帝となつて欲しい」

エンペラ星人は空中にディスプレイを出し、そこにある物を確認する。

それは、ベルであった。

それは、巨大な鍵であった。

それは、巨大な三角のカラータイマーだった。

「出来た、最高傑作だよ!!」

銀髪のメイドは赤き悪魔により生まれ変わった。

肩や背中から飛び出す棘、腕は巨大で鉤爪が鈍く光る。メイド服のスカートからは4つの触手と尻尾が出ている。額にはエースキラールのような赤い宝石のようなものが付いている。

かつて、ヤプールがウルトラ兄弟を抹殺するために怨念によって作り出した最強最大の超獣

『U（ウルトラ）キラールザウルス』

「どうだい？体の調子は、慣れればすぐに元の姿に擬態できるよ」

「最高です、これが私、体の中から力が溢れてくる」

「早速、調整に入ろう、まずは『地獄の超獣24時間耐久』だ」

「ええ、わかりました。始めましょう、早くこの力を試したいので」
その笑顔は狂気が含まれていた。

夏が来たら

「スイーツが食べたい」

その一言から俺はコンビニへ出かけた。皆さんも突然甘い物が食べたくなる事ってありませんか？俺もそうです。

「新作スイーツがあつて本当に良かった」

ガサゴソとビニール袋の中には様々なスイーツが入っている。うまさーと涎を垣間見せながら家に帰ろうとするオリ主、らんらん気分でスキップと鼻歌を歌いながら帰宅する。

「……………あ、マスター」

なんと、散歩していたアキラこと、アギちゃんとはったり出会ってしまった。

「あ、アギちゃん、アギちゃんも一緒にスイーツ食べる？」

「……………!!ハイ!!」

せーかいじゆうがー、君をまーつていーるー、やーみよを照らせ、光ーの戦士ーよー、あ、ここ例の学校じゃん、プールの方でワイワイやってる……………いいなく、俺もプールに行きたいなく、プールなんて何年も行ってないし、最後にプールに行つたのって前世の中学生の時だったっけ？

あの時は楽しかったな、あいつが女子更衣室に特攻仕掛けに行つてボコボコにされてたな、それから耐水小型カメラ持ってきて盗撮してたやつもいたし、誰だったかの女子のパンツ被って顔面にコンクリート投げつけられてた奴もいたなく、

「懐かし〜なく」

あの頃が懐かしいよ…………… 『なくにが懐かしいんですか？』
ウオイツ!!? って、ルディアンかなんでこんなところにいるんだよ、てか
それなんだよ、ラムネ？

「はい、実はラムネ売りのバイトをしまして、あ一本如何ですか？
美味しいですよ♪」

「それじゃ、一本貰おうかな、ほい100円、にしてもガーゴルゴンの
奴はどうした？」

「ああ、ガーゴルゴンさんなら今、出かけてますよ」

あ、そう……………なんかやらかしてなきやいいんだけどなく、
ルディアンと別れた後、そのまま家に帰宅した。帰る途中、銀髪によ
うな白髪のようなイケメンと最遊記の悟空のようなコスプレした奴
とすれ違った。それと一誠兄ちゃん、いや一誠さんともすれ違った、
俺の事は分からなかったらしい。当然と言っちゃ当然だな、前まで自
分より背の小さかった俺と今の俺を同一人物とは思わないだろう。

「さっきの娘、どうも気にかかるな」

「どうしたんだ？ヴァーリ」

さつきすれ違った2人のカップル、両手に袋を持った彼とその隣にいたパーカーの彼女、特に彼女の方からは異質な力を感じた、彼女の存在自体が力であり生命である。そんな感じだ。

「調べる必要があるかもしれないな」

『その必要はありません』

「やー朱乃ちゃん、死んだはずのサデスだよ♪」

鳥居の上になんとハイテンションの少女、その姿を見て朱乃は驚愕の表情をあらわにしていた。

「サデス……………ちゃん……………なんで……………うそ……………」

「本当だよ、久しぶりだね、お母さんは元気かい？」

「そんな……………貴方は誰!!」

「酷いなく、サデスだよサデス、サ・デ・ス！君の親友で、君が墮天使

に襲われた日に君を庇って死んだ、サデスだよ、と言っても僕は死ぬ事は無いんだけどね、ほら」

姫島朱乃には親友がいた。だがその親友は母と父の結婚に反対していた墮天使達の凶弾に倒れてしまった。だが、親友は生きていた。元々サイボーグであった彼女は自身の死を偽って彼女の前から姿を消したのだ。

「これは決別と餞別の攻撃だ、受け取ってくれるよね♪」

地面が盛り上がりそこから、1人の少女が出てきた。赤と黒の目に右腕は機械のアーム、左腕には巨大な銃を搭載、義足とバイザーのよななものが目立つそれは、

奇機械怪獣デアボリック

その背中に自身の腕をドッキングさせる、デアボリックの首からデアボリックキャノンが出現、そこにエネルギーがチャージされていく。

「バイバイ♪」

デアボリックキャノンが発射された。

神社の裏山が丸々、宝石に変わったと言う事件が発生したが、誰もそれを気に留めるものはいなかったと言う。

「……………ハア、ハア、ハア」

血まみれの白い鎧、今にも碎けてしまいそうなそれをまとう者は息も絶え絶えにかろうじて立っている。周りには仲間達がボロ雑巾のように倒れていた。死んではない、だが、満身創痍で体を動かす事も出来無い。

「……………ハア、ハア、……………なぜおまえが、ハア、ハア、グツ!!
……………それに、その力は……………本当におまえはグレイファイア・ル
キフグスなのか……………」

確かに、そこにいるのは、少し若い気がするが、紛れも無いグレイファイア・ルキフグスだ、以前変わらなく、スカートから伸びる二つの触手の様なものを除けば、

「余計な詮索は自身を滅ぼしますよ、ね、白龍皇」

グレイファイアのスカートの中から、なんと多数のミサイルが放たれた。それは曲線軌道を描きながらヴァーリー達に襲い掛かった。

大変!!魔王獣が来たツ!!

次元の狭間のどこか、人一人居ない全くの無

いや、かつては全くの無だった場所、悪魔も天使も、神ですら認知して居ないそこに、異常な物が佇んで居た。

巨大な繭、のようなもの。そしてその近くには羽や腕、足などを腕がれた悪魔達……………繭は触手を出しそのもの達を捕食していく。その状況を満足そうに見つめるゼットン星人エド、

「美味しいか?……………そうか、美味しいか。そいつらは幸せの絶頂から絶望のどん底へと落とし更に絶望に絶望を与え壊れないようにゆつくりと仕込んだ極上の餌だ、もつと、もつと食べろ。その絶望が恐怖心が、お前を育て上げるのだ」

最後の一人を食した所で、その繭は動き出す。卵から孵るようにならここから産まれたのは、まさに絶望だった。

「時は来た、行こう我が主の元へ」

「映画撮影?」

ゴモラ達は俺を主人公にした映画を作ると言った。題名は『ウルトラマンベリアル・ザ・ムービー』 ベリアル大帝国』らしい、ストーリー

リーは

『人外が跋扈する地球に颯爽と現れた心優しき帝王が引き連れた仲間達と共に自らの帝国を築き上げる』と言うハートフルボツコメデイらしい。

いや、完全に題名ベリアル銀河帝国のパクリだろ!!え?自分たちだけで鑑賞するだけだから、それなら別にいいけど、悪用とか絶対すんなよ!!

それと、昨日、ベリアル陛下の夢を見ました。どうやら俺と融合したベリアル陛下が元の世界に帰ると言って居ました。しかし、融合した肉体はこのままなそうなので、引き続き俺はこの世界のウルトラマンベリアルとして存在するらしいです。

まー、なんでも息子さんが頑張っているらしいので、てかベリアル陛下奥さんと息子さんが居たんだ……………驚き。

それと、もう1つ、実は前まではゼツパンドンやEXゼットンなどの強化個体もしくは亜種個体は元々同一人物だったのだが、なんの因果か、別々の個体として分かれてしまいました。

つまり、ゼットン、ゼットン2代目、ファイヤーゼットン、EXゼットン、マガゼットン、ゼツパンドン、ゼットン変異種、パワードゼットン、などなど挙げ句の果てにはハイパーゼットンデスサイスも生まれました。え?ハイパーゼットン?さー、いるのかは知らん。

ちなみに性格も本家とは大違いです。ゼツパンドンはなんかジャグラーっぽいし、マガゼットンは逆ハーレム築こうとしてるし。もう駄目だ。

今、悪魔、天使、墮天使達の三大勢力が和平を築く為にこの場に集結していた。魔王、大天使、そして墮天使提督、彼らは三大勢力の最上位であり、またその種族最強を誇る存在達である。メンバーは

魔王サーゼクス・ルシファーを筆頭に、

メイド　グレイフィア・グレモリー、

魔王サーゼクスの妹　リアス・グレモリー、

現赤龍帝　兵藤一誠、

グレモリー眷属、アジア・アルジェント、姫島朱乃、木場裕斗、ゼノヴィア・クアルタ、

ソーナ・シトリーとその眷属達、

墮天使提督　アザゼル

現白龍帝　ヴァーリー（ボロボロ）

墮天使提督秘書　シュバルツ・ロア

天使長　ミカエル、

熾天使　ガブリエル、

熾天使　ラファエル

熾天使　ウリエル

「みんな揃ったようだね」

サーゼクスの声が響いた。

「ああ、そうだな」

「それでは始めましょうか」

三大勢力の和平会議が始まる、そう思った瞬間、

「すいませくん!!遅れてしまいました!!」

可愛らしい声が響いた。皆が振り返るとそこには赤い髪をしたツインテールの少女とその仲間達がいた。

「貴方方は?」

「す、すいません、私達は魔獣創造により作られたリアスさん達の協力者なのです。今日は三大勢力会議に参加させていただくべくこの場に参上しました。あ、私はピグモンと申します、こっちはゼットン星人のエドさん」

「魔獣創造だって!!?おいおい、マジか」

「確か、リアス達の話にあった、」

「はい♪よろしくお願いします」

ピグモン達の乱入というイレギュラーがあつたが、和平会議は順調に進んでいった。これからの三大勢力の未来、人間への干渉、そしてヴァーリー達を襲った謎のグレイフィアに似た存在の事、

「それで、お前達の事も聞かせてくれ、お前達はこの世界をどうしたい

？」

アザゼルはピグモンさん達に話を振った。ゼットンさんやギヤラクトロン、それにあのコカビエルを虐殺したダークロプスやエースキラートと名乗った女戦士の事も、

「はつきり言っただうでも良いです♪」

「どうでも良い？どう言う意味だ？」

「言葉の通りです、私達の主は平穏を望んでいます。我々は主をあらゆる危機から守る為に、またそう言った存在を抹消する為に、世界中に仲間の怪獣娘達を派遣しています。」

最強の殺し屋『エースキラート』に教会の戦士『キリエロイド』、そして貴方を苦しめた邪神、

「なんだとツ!!邪神だつて!!?どう言う事だツ!!まさかお前らの主とやらがああ邪神を創り出したとでもツ!!」

「その通りです、邪神ガタノゾア様は主から勝手に過去へタイムスリップすることのできる怪獣達を使って過去に向かってしまわれたのです。その事で主はもーブンブンでした。でも、彼女のおかげで大きな後ろ盾が出来た事には感謝しています。」

パチンツ!!エドさんが指を鳴らすと、彼女達の後ろのカーテンが勝手に開いた。そして窓の外に途轍もない光景が映し出されていた。

それは大きく横に割れた空とその中にいる無数の怪物達、いや怪獣達、

タイラント、ベロクロン、グドン、ギエロン星獣、グビラ、ブラツクエンド、ホー、パワードレッドキング、ゴードレス、メルバ、ダラン

「ここかい？祭りの場所は」

一番連れて来てはいけない血の気が多いママを連れて来てしまったようだ。どうなる三大勢力。

絶望の降臨

絶望とはなんだろうか？

今、まさに目の前で起きていることこそが絶望と言えるだろう。共に戦って来た仲間が、仲間だと思って居た存在が、実は敵であった事に、

「言ったはずだ、我々は仲間ではない、協力関係にあるだけだ」と

リアス部長は震え、明乃さんは唾然とし、ゼノヴィアは涙を流し、木場は身体中から汗を出し、アーシアは神に祈り、俺は現実を受け入れられずにいた。

「なんで、なんでなんですか……………俺たちは、俺たちは仲間じゃなかったんですかッ!!!」

「アハ、君たちは私の話をちゃんと聞いていたのか？ 私たちは協力関係だと」

「協力関係なら!!仲間って事じゃ無いですかッ!!」

「呆れて物も言えない、協力関係とは違いに利用し利用されることを言うのさ、君たちは随分と役に立ってくれたよ」

リアスはその言葉に怒りをあらわにする。

「なんですってッ!!」

「君たちのお陰でスムーズに事が進んだよ。君と言う隠れ蓑のお陰で上級悪魔やぐれ悪魔を自由に誘拐する事が出来た、彼らはもうこの世には居ないが、我らの糧となってくれた。それに君たちの近くに

た事で情報も手に入ったしな、一石二鳥だよ」

言葉が出なかった。俺たちはあいつらに利用されていただけなのか。あの優しさは嘘だったのか？

「こんな時、確かこう言うセリフがあったな、

『今までご苦労、君たちはもう、用済みだ』かな？それとも、

『私は最初から君たちのことを仲間だと思っただけか、どちらにせよ、君たちの利用価値はその肩書きだけだったと言うことさ。』

アーシア、君を助けたのも君らを油断させる為、フェニックス家を潰したのは陛下の新装備の実戦投入の為、墮天使コカビエルを殺したのだからダークロプスゼロの実験データを手に入れる為だ。

改めて感謝の言葉を送ろう、

私たちの為に働いてくれてありがとう」

その言葉には本当に感謝の念が込められていた。だが俺たちにはもうその声は届かない。多分、血の涙を流しているだろう。強く握りしめた拳からは血が流れる。

「貴ツ様ッ!!!」

ブチ切れた悪魔達が襲いかかってくる。自身の長の妹を汚された彼らの怒りは計り知れない。

「そうカッカとするな、我々の敵は別にあるだろう？そうだと、ロア、いやブラックキングよ」

ガクツ、と彼らは倒れる。コツコツ、ゆっくりと落ちて行く悪魔の道をスーツ姿の女性が歩いて行く。それは、墮天使提督アザゼルの秘書であり、灼熱の用心棒と呼ばれたシユバルツ・ロアこと

用心棒怪獣ブラックキングであった。

「この立場にもいい加減ウンザリしていたところでした。改めて自己紹介しましょう、私の名はブラックキング、社長の命によりあなた方のスパイとしてあなた方の仲間に交わささせてもらいました」

驚きの声が上がった。

「……………なるほど、俺たちの情報が筒抜けな訳だ。まさかお前が裏切り者だったなんてな」

「ええ、そのお陰で奴らの情報や他の神話系統の情報も手に入りました」

まさかの裏切りに墮天使側も啞然とせざるを得なかった。だが、そんな沈黙も一瞬で終わりを告げた。最初に感じたのは恐怖、次に感じたのは絶望、

更には暗雲が立ち込めかつての邪神を思わせる闇の力がそこには存在していた。

燃え盛る校庭、その中心に降り立つ黒いマントと仮面を告げた存在、皇帝とはまさに彼女のことを指し示す。

「お初にお目にかかる、余はエンペラ、暗黒大皇帝エンペラ星人なり」

そして、その後ろに同じく凶悪な力を持った存在達がいた。凶悪な力を持ちし怪獣達。

サングラスをかけた妖艶な女性が

「暗黒四天王が1人、知将『メフィラス』」

骨と筋肉を逆転させたような怪人が

「同じく謀将『デスレム』」

全身が氷で出来た氷結の怪人が

「俺はグローザ星系人!!豪将、不死身のグローザム様だ!!」

赤い人間とは思えない女性が

「私は超獣及び兵器開発部主任、邪将『ヤプール』、そして我が最高傑作の二体だ」

エースキラートもう1人、

「グレイファイアが!!もう1人ツ!!?」

「私はグレイファイアであってグレイファイアではありません。そう我が名は究極超獣『Uウルトラキラートザウルス』です」

「お前がヴァーリを襲ったつうサーゼクスの奥さんのそっくりさんか、成る程本当にそっくりだ」

「ゴルアツ!!何私たち無視したんだツ!!」

ブチ切れたマガオロチがガンを飛ばしてくる。ギャーギャーと騒ぎながらマガ迅雷を辺りに撒き散らす。

「前回、あんな盛大な出方して今回出番これだけかッ!!?何なんだよッ!!詐欺ですよこれッ!!!」

物凄い形相を浮かべるゼツパンドン、

あたりは火の海に包まれていた。悪魔達は恐れ慄いた、我らが王が絶対なら最強の長が手も足も出ないまま、倒された。

「魔王サタンは死んだ、これからはこの俺様が貴様らを支配してやろう」

「新たな神、いや皇帝、ベリアル!!」

はい!!カットツ!!

「いや、良いシーンが取れたよ」

クライマックスシーン、最強の敵サタンとベリアルの一騎打ちにベリアルは勝利した。と、ここまでは良いのだが、2万年早いぜ!!とか、

ブラックホールが吹き荒れるゼツ!!とか、ゼロっぽいセリフを言ってしまうのだ。ベリアル陛下、ゼロの体乗っ取った時に口癖でも写ったか？

乗っ取った人の、いや人じゃ無くてウルトラマンなんだけどき、取り敢えずその乗っ取った体の方の性格とか口癖とかかって写るのか？いや、でも、あり得るのか？あ、でもAⅡ北斗星司になってるけど、前のAはどうなったのだろうか？ジャックとか、

そもそもジャックとかAとかタロウの人格ってウルトラマンのものなのか？それとも人間のものなのか？

ジャックやAの性格は完全に郷秀樹と北斗星司の人格だろ。ならジャックとAの人格はどこへ消えた？それにタロウの場合、最終回であれは人間に戻ったのだろうか？それともあのバッチの中にタロウがいてタロウに変身してタロウだけ帰ったのだろうか？そもそも東光太郎がウルトラマンタロウ自身なのか、もしも別々にゼロとタイガやギンガとヒカルのような感じだったらなぜ劇中に登場しなかったのだろうか？だがタロウ自身だとすれば、なぜバッチを返すだけで元に戻ったのだろうか？タロウはウルトラの父と母の息子なのは明白であるしタロウの存在も子供の頃から居ると確認できる。タロウのバッチは仮面ライダーのような変身アイテムなのだろうか？だとしてもそれはおかしい。

初代ウルトラマンはハヤタ隊員との融合解除後、ハヤタの記憶は消されて入るし、しかもちゃんとウルトラマンとしての意識とハヤタとしての意識が2つ存在している、セブンのようにウルトラマン自体が擬態しているのであれば、東光太郎などと言う人間の存在は必要ない。ジャックの時は郷秀樹はウルトラマンとして転生している。あれ？だけどそれならジャックの人格どこ行った？

「おーい、次のシーン撮るよ〜」

あ、オツケー。

.....この議題は後で考えよう。

怪獣対三代勢力対禍の団

「これは一体、どういう状況なの!!？」

タイミング悪くこの場に現れた謎の組織。驚く三大勢力、キラリと目を光らせる怪獣達、獲物を狙う獣の目をしていた。

「コイツラ、クツテイイノカ？」

涎を垂らし、舌を伸ばすボガール。無表情で笑う矛盾した顔で彼らを見るグリーザ。片腕に紫色の煙状の生命体を纏わせ、新しいおもちやを見つけた子供のような笑顔を浮かべるヤプール。

ヤプールは指を鳴らした、すると、空が割れ赤い空間が現れる。そこからサンゴのような赤い突起物を持つ緑色の怪獣が二体現れる。奴の名はミサイル超獣ベロクロン、ベロクロン二世、更にレースクイーンのような格好をしたオレンジ色の髪をした少女が現れる。一角超獣バキシムはベロクロンと共に全身からミサイルを撃ち放った。更にグレイフィアのスカートからもミサイルが放たれる。

特に意味の無いミサイルが謎の組織を襲う。

「お前達、食っていいぞ。だが、あの女と兵士は少し残しておけ、あとは殺せ」

ミサイルから難を逃れた兵士達は、突如、捕食者達に襲われる。煙は晴れ無い。爆煙は霧へと変わり、あたりを覆い尽くす。悲鳴が上がった。隣にいた奴が突然、断末魔と共に消えた、次は自分が食われた。霧の中、ボガールは翼を広げ敵を食らう。いやボガールだけでは無い、霧の中、伸びるハサミが次々と霧の中へと引き摺り込んで行く。

悲鳴をあげることもなく消えて行く。自分が消滅する、無へと変わって行く。しかし、恐怖は無い、快樂すら覚えるこの感覚、消えて

行くのがこんなにも美しいことだなんて、全てはいつか消えるのが道理。無情で無表情で無際限な存在が笑い出す。霧の中に響く笑い声、それは本当にあるものなのだろうか？全くの無の存在が全てを美しく終わらせる。

そう、美しき終焉、

「美味しそう♪」

エロい服装をした女性が首筋に食らいつき、血を吸う。吸血生命体マリキュラ、巨大なコウモリのような化け物が同じく血を吸う。吸血魔獣キュラノス、コウモリ怪獣バットン、ボールが血を吸う。植物も、触手も、赤い花も、うまそうに、

ここは餌場、捕食者達が弱者を食らう。そこに絶対のものがある、人間は弱者は食われる運命。蹂躪するのは怪獣、絶望の宴。

「おいおい、いいんですかい皇帝陛下？俺たちの出番無くなっちゃいますよ」

「面倒な手間が省けるといふものだ、グローザムよ。それよりも、お主らの相手が来たようだぞ」

物凄い速度でこちらに突撃してくるヴァーリ、狙いは言わずもがなグレイフィアだ、グレイフィアはスカートより触手を伸ばしヴァーリーの一撃を止める。

「また、無様にやられに来たのですか？」

『あの時のリベンジマッチといこうか!!』

『Divide!!Divide!!Divide!!Divide!!Divide!!Divide!!』

『HalfDimension!!』

半減、及び半減空間を作り出しグレイファイアを攻撃する。

「無駄だ、私の最高傑作にそのような攻撃が通用するはずがないだろ」

状態干渉系の攻撃は全く意味をなさない。それどころか、マイナスエネルギーを力とするUーキラザウルのエネルギーを吸収しダメージを受けてしまう。

「もう一度、痛い目に合わなければワカラナイヨウデスネ」

両腕は黄金の剛腕と巨大な爪、蠢く4本の触手にキラウオーヘッドと呼ばれるミサイル突起物、体の大半が変貌した。

最強の生物兵器、究極超獣Uーキラザウルスと言う怪獣娘、いや超獣娘へと変わった。

それと同時に、空に暗雲が立ち込める。

「赤い雨が降る、それが我々ヤプールの象徴」

霧は晴れ、赤い雨が降る。赤い赤い血のような雨が降る。

「退避しろ、お前らも巻き添えを喰らいたくなければな」

赤い雨の降る夜の学校で、今、究極の存在が姿を現した。戦いはまだ終わら無い。

うーし、次、クライマックスとるよー!!監督の声がこだまする。電離層からやって来た化け物を退治した後か、マガバツサー然り姑獲鳥然りガゾート然り、なんで電離層にはろくな奴がないのだが。

「ベリアル様はこの椅子に座って、このセリフを読んでください。カンプはちゃんと隠れるようになってるので」

赤とか黒とか紫とかベリアルらしいカラーの部屋に円状の階段とデツカイベリアル様専用の椅子が用意されてて、下には怪獣達が片足をつき頭を下げている。目の前には巨大なカーテン、そしてその奥には多分、モニターがあるのだろう。

「よっしゃ、んじゃ、行きますか」

ULTRAMANスーツ version. Kaiserを装着し、玉座へ向かった。

あ、そういやメガネ新しいの買わないとな。……………アレ?なんで俺、眼鏡なんて欲しがったんだ?

美しき（日常の）終末

「計画は順調に進んでいるな」

「この調子だ　なら我らの世界ももう目の前だね」

「そうだ、もうすぐだ、もうすぐ」

「そう言えば、旧魔王派の連中が動き出すらしいわ」

「機は熟した、さあ行くぞ、新世界を創り上げる為に」

人は目の前にある理不尽に背を向けたくなくなることがある。現実を受け入れようとせず、妄想、又はそれが及ばない所へ逃避しようとする。それは知能があるからなのか、それとも生物の本能なのかそれはわからない。だが、1つだけ言えることがある。

「さて、弁解を聞こうか？」

俺の怒りは頂点を天元突破した。漆黒のオーラに身を包み、赤いマントがそれを際立たせる。更に王座に座る姿はまさに威厳とカリスマ

マ溢れる皇帝陛下に違いない。

「我らはマスターのことを思つて……………」

「ほお？俺のことを思つて俺に迷惑をかけた、そういうことか？俺だけならまだしも、他の人たちにも迷惑をかけて俺が喜ぶと本当に思つていたのか？

お前たちが俺を思つてやってくれたのは分かる、けどもうそんな危ない真似はするな」

彼女達の強さは人一倍知っている。だが、それでももしも万が一と
いうことがある。小さき者達人間が最後の敵を倒したように、だから不安なん
だ。

「お前達のごとは絶対に俺が守る。絶対に」

彼女達の肩を抱き寄せる。涙を浮かべながら、あるいは顔を真っ赤にしながら、あるいは喘ぎ声をあげながら、

(とは言ったもの、どうしよう、マジで)

ホロリと冷たい何かが頬を伝った、どうやら後戻りはできないらしい。

学校の校庭はすでに戦場と化した、爆撃されたかのようなクレター跡がいくつもあり、空には無数の色彩の光が飛び交っている。何を隠そう、ヴァーリ・ルシファアとUキラーザウルスことグレイファイアである。2人の戦いはヴァーリが防戦一方であり、グレイファイアは触手からの光弾、ミサイル、ビームと生きた火薬庫ことベロクロンの何倍もの弾幕がヴァーリを襲う。

ボロボロのヴァーリ、壊れた鎧のかけらが体に突き刺さり尋常じゃない痛みを生み出す。

『もうやめろ、ヴァーリ!!このままでは持たんぞ!!』

アルビオンがやめさせようとするが、ヴァーリは喜びの顔で、

「まだまだ!!まだやれるツ!!!」

と、更にギアを上げる。

「ムダダ、アンチセイクリッド・ギアシステム神器無効化システム二より貴様ノ能力はムコウカされてイル、どんナ神器モ私にハ効かなイ」

ヤプールが開発した神器無効化システムはあらゆる神器の効果が無効にすることが可能で、神器の無効化とはつまり神の奇跡の無効化と同じである。

「その戦い、私たちも混ぜてもらおうか」

あたりに響く声、その声はどこかで聞いた覚えのある声だった。

「エド、か」

宇宙の我が主に仇なすものに死をもたらす神となったのだ!!!」

エドは高らかに笑いながら、ハイパーゼットンさんを見つめるのであった。

「神だど? ならば今、ここでどちらの作品が優秀であるか白黒つけようじゃないかエド」

Uキラーザウルスの下半身に地面から伸びた触手が絡まり融合していく、そして校庭の地面から巨大な下半身が出現したのだ、アントラーのような巨大な鋏、4本だった触手は6本に増え、その禍々しさも増している。ヤプールの科学技術の全てを結集し誕生させた最強最悪の超獣、

究極巨大超獣

”U”ウルトラ

キラーザウルス

ネオ

最強の怪獣に最強の超獣がこの駒王学園について姿を現したのであった。ついにその2人がぶつかり合おうとしたその瞬間、空を暗闇が覆った。

「来られるのですか、我が主よ?!?!」

「一体……………なんなのよ……………」

そしてちやつかり巻き込まれちやつてる旧魔王派たちであった。

わああああああああ!!マジどうしようッ!!トトトとりあえず
まずは落ち着け、落ち着くんのだそうさ、そうさ!!ヤプールからもらっ
た新しい兵器を使えばなんとかなるだろう………そうだよ
きつとなんとかなるさ♪)

ウルトラマンベリアルは辺りを見渡すと虚空より赤い機械『ジード
ライザー』を取り出す、そして新兵器『怪獣カプセル』を起動させた、

(ヒーヒーフー、ヒーヒーフー、落ち着け、あいつのよこしたマニユア
ルどなりにやれば問題なし、えと召喚のセリフとかどうしよう
………)

「ゴモラ」

『ギャオオオンツ!!』

「レッドキング」

『ゴアアアツ!!』

「これでエンドマークだ」

『フュージョンライズ!!ゴモラ レッドキング』

二体の怪獣が霧のような形になって更に更にベリアルのカラータイ
マーからも同じように紫色の霧のようなものが更に登る。その3つ
は空中で1つとなり新たな姿を形成した。

ウルトラマンベリアル!!スカルゴモラ!!』

スカルゴモラちゃん

『フュージョンライズ!!エレキング エースキラー』

ウルトラマンベリアル!!サンダーキラー!!』

サンダーキラーちゃん

『フュージョンライズ!!ゼットン キングジョー』

ウルトラマンベリアル!!ペダニウムゼットン!!』

ペダニウムゼットンちゃん

『フュージョンライズ!!ファイブキング ゾグ第二形態』

ウルトラマンベリアル!!キメラベロス!!』

ウルトラマンベリアルの分身でもあり妹?キメラベロスちゃん

『フュージョンライズ!!ゴモラ タイラント』

ウルトラマンベリアル!!ストロングゴモラント!!』

『フュージョンライズ!!キングジョー ギャラクトロン』

ウルトラマンベリアル!!キングギャラクトロン!!』

『フュージョンライズ!!マガオロチ アークベリアル』

ウルトラマンベリアル!!禍々アークベリアル!!』

『フュージョンライズ!!ベムスター　　ゼットン

ウルトラマンベリアル!!ベムゼート!!』

『フュージョンライズ!!ベムラー　　アーストロン

ウルトラマンベリアル!!バーニングベムストラー!!』

4人の怪獣娘と5体の怪獣が生み出された。彼らはベリアルの後ろに着く、すると突如更にその後ろに煙が立ち込め、それが晴れると新たな怪獣達が彼の真後ろに立っていた。

ザイゴグにグリーザ、カオスダークネス、と最強のラスボス怪獣や劇場版怪獣達がこぞってその姿をあらわす。空の異次元空間の中にいる怪獣達でさえ三代勢力にとっては絶望的な状況なのにこれが更に絶望的な状況へと追い込んだ。

その周りには小型の球体型偵察機『ユートム』がこの映像を全世界の裏世界の者達に発信している。

「我らが皇よ、お待ちしておりました」

エンペラ星人は彼に赤いマントを渡す、ベリアルはそれを羽織る、そしてエンペラ星人は宣言した。

「聞け、愚かなる者どもよ!!我々の名はベリアル帝国!!我々の目的はただ一つ!!

O。

そう転生者と呼ばれるイレギュラー、そして今現在、ベリアルに
とって最悪の敵、

赤と銀体にクリスタル状の発光体のメガネの少年が、

胸元にあるX状のカラータイマーにヘッドホンのようなパーツを
持つ少女が、

青と赤と銀色の髪に整った顔、そして額のビームランプを持つ少年
が、

彼の敵は奇しくも彼の憧れた存在達であった。

光と闇

(ベリアル様の霊圧が消えたッ!!?)

ねじ曲げられた運命^{ストーリー}、無限への派生、その代償は突如として現れる。

(ウルトラマンゼロにXにギンガ、成る程、俺達怪獣の敵はウルトラマンって事かよ、畜生)

そもそも、世界の理に干渉した時点でその分のしわ寄せが出来るのは当たり前のことだ。つまり、俺の転生の代償と言う訳だ。ベリアルと言う規格外の力を手にした自分に対し同じく転生者でウルトラマンの力を持つものが敵となった。しかも三人、

「俺たちは禍の団、転生派、ウルトラマンベリアル、貴様を倒す存在だ」

転生者ゼロがそう言うとき三大勢力が歓喜の声を上げる。まるでヒーローのようなその姿に希望の光を見つけたように。

(ベリアルにウルトラ戦士ぶつけてくるとか、思いつきし皮肉やん、流石にここで今戦闘なんてしないよね、ね

ね)

「ウルトラマンか、記憶にはあるぜ、雑魚ばつかで消化不良してたところなんだ、私ら禍一家の力見せてやるよ」

中指を立てながら煽るマガオロチ、どうしよう更にとんでも無い事に成りかけているのだが。

「あん？テメエ何言ってるんだ、ベリアル様の分身であるこの俺、キメラベロス様があいつをぶっ殺してナデナデしてもらうんだよ!!そこどけ!!」

「なにい？私の旦那を寝取ろうってか、いい度胸じゃないか」

あ、もう駄目だ、仲間同士で殺り合うつもりだ………仕方ない、全員、戻れ、ギガバトルナイザーを取り出すと怪獣達を全員收容する。これ以上面倒なことになつてはたまらないからだ。

「お前一人で俺たちに勝とうとそう言う事か？」

「安心しろ、リンチにするほど、俺様は悪魔じゃねええ」

ハツタリである。かたや幾度となくベリアルを倒してきた真紅のファイターの息子、かたや無数の怪獣達の鎧を身に纏い戦う未知の戦士、かたやグラキやらダークザギ様やらをカラータイマー鳴らさず倒してきた未来の超人、

いくらベリアル様の力を持っているってかこの世界のベリアルだけれども、勝てる見込みはない。つかチートラマンが三人寄って集ってリンチとかなんて絶望？

「どうやら、その通りのようだ、ゼロ、今の僕たちじゃ彼には勝てない」

「あいつちョームカつくく」

ちなみに話の腰を折るようで失礼かも知らないが、後ろではイツセーとヴァーリが戦ってイツセーが宝玉を籠手に嵌めてぶん殴っているところだ。後ろからおっぱいおっぱいうるさい。

「ヴァーリ達も退散したようだし、俺達も帰らせてもらう」

と言いながら宣戦布告だけして帰って言った。正直ホツとしてます。戦闘が終わり静かになった校庭、さあ俺も帰ろうか、マイホームに

「待ちなさい」

なんでだよ!!なんなんだよ!!!今日ぐらい帰らせろよツ!!!グレモリーに止められ、

「あ?なんだよ」

首を鳴らしながら見事なシャフ度で振り返る。一度やって見たかったんだよコレ。

「返すと思つて?貴方には私達と来てもらう『無能と聞いていたが実力の差も分からねえ馬鹿とはな』ツ!!!」

威圧(笑)で脅す、なんか、プライドへし折れちやつたみたいだな、まあいい気付け薬になつただろう。んじやバイチャ、

飛び去るベリアルをただ見つめることしかできなかつた三大勢力達、

「嬢ちゃん、お前は頑張つたよ、俺たちは奴を前に動けずにいた、墮天使提督の名折れだ」

見ただけで分かつてしまった。奴の力を、例え世界最強のあの二体の竜でも奴には勝てないだろう。それ程までに恐ろしい存在であったのだから。

「んで、エンペラ星人、本当に宇宙征服なんてできんのか？」

「ええ、出来ますとも」

自信満々に答える皇帝陛下どの、可愛い。と言っても俺が知っている範囲じゃ宇宙征服はもちろん世界征服すら出来ないと思うんだが、

「ご安心ください、まず今、冥王星付近で建設中の巨大人口天球『ビートスター』ビートスター内部には惑星リセット兵器『ギガエンドラ』運用戦艦『ブリガンデ』『グローカーマザー』時空移動侵略兵器『デルスト』そして量産型『キングジョー』『グローカー』『インペライザー』『レギオノイド』『ダークロプス』を配備、ちなみに作業は作業用ダークロプスを使用し、エネルギーには『ビクトリウム』と『エスメラルダ鉱石』を使用『もういい!!もういいよ!!』?これではまだ足りませんか?ならばゲッタ○線とかイ○オンとか」

やめろ!!これ以上パワーインフレを起こすな!!もうすでにウルトラマンと言うパワーインフレが起こってるのに更にカオスにしようとする!!と言うか家の真下に秘密基地なんて作りやがって、今も隣でキングジョーが大量生産されている。ちなみにロボット工場は世界中に存在し今もダークロプスなどを大量生産している。

「必要とあらば良いの『ンダモシテX』や『超時空破壊爆弾』も作れま

すが」

破壊兵器をそう安安と作られてたまるか、そう言えばガタノから手紙来てたな、今度帰ってくるって、新技とか身につけたらしいけど、あ、端っことでマガタノゾーアが泣いてる。どうした、え？本家が帰ってきたら自分の存在意義が無くなる？……………何言ってるんだよマガタ、俺はいつもお前の味方だぜ、大丈夫だって、俺はマガタノゾーア好きだし、それにそう言うミステリアスな所とかもカッコいいと思うぜ。自信持てよ、お前にはお前にしかない魅力つてもんがあるだろ、ガタノゾーアはガタノゾーア、マガタノゾーアはマガタノゾーアなんだから。ほら泣くなよ、俺に抱きついてもいいんだよ、あ、エンペラお前は駄目、ほら、遠慮すんな。

なんとも奇妙な光景が生まれた、マガタノゾーア（怪獣体）と人間が抱き合っている。これそこ種族を超えた愛なのかもしれないかもしれない。

一方、禍の団転生派では、

「なんであの時、あいつを殺らなかつたんだ」

「そうだよ、あんな雑魚、私らなら」

「無駄だよ、今の俺たちじゃ、奴には勝てなかつた。兵力は勿論、経験

値も能力も奴の方が上手」

「ならばどうするんだい？」

「あてはあるさ、今はゆっくりとそして確実に戦力を上げていこうじゃないか」

グレゴリにて、

「一閃光と暗黒の龍絶剣《ブレイザーシャイニングオアダークネスブレード》号から緊急連絡!!太平洋上にルルイエ出現!!」

「イースター島よりメルバ出現!!」

「世界各地でギジエラの発芽を確認!!」

「ガルラ!!監視地点から消失!!地下を南東に移動中!!」

「緊急事態発生!!緊急事態発生!!全勢力に非常通達!!コードレット、これは演習ではない!!繰り返し、これは演習ではない!!!非常警戒態勢に移行!!!」

奴が、邪神が目覚めた!!!!
「

冥界合宿のヘルキャット番外編

怪獣娘と暮らす

オリ主の苦難（笑）編

ベリアルは動かない

「そう言えば、夏休みは確かオカ研が冥界に行くんじゃないかな？ たったつけ？……………いいやめんどくさい、別に何が起こるわけでも無し、今日はゆっくりみんなとゲームでもしてよ。」

「そんな……………どんな戦いにも負けたことのない無敵のガッツ星人が負けるなんて」

「ふふふ、この俺に挑もうだなんて20,000年早いぜ」

無敵（笑）のガッツ星人をゲームでノして明日はどのゲームをやるうか、ん？これはチラシか？確かザンドリアスとメカガラスとノイズラー達がやつてる『80s』って名前のバンドで活躍してたけど、キングジョー系アイドル『金城クララ』という名前でアイドルデビューしてるキングジョーさんの握手会のパンフレットだ。妹のキングジョーIIこと『金城ハルカ』とのダブルユニットでやつてる。

「マスター、訓練場を使いたいのだが構わないだろうか？」

「あれ？ブラックキング？姿変えた」

前の黒褐色の秘書っぽい姿からファンタジーの女騎士っぽい姿に変わってる、肩に大剣なんか担いでるし。訓練場ならさつきレットキングが使いたって言ってたから貸したけどレットキングと一緒に別な別に良いよ

トモダチ連呼しながら内臓を食らってる。

ドスウンツ!!!

一心不乱に俺の内臓を食べているガゾートを吹き飛ばす茶色の怪物、否、完全生命体イフ第3形態、全身からミサイルや誘導火炎弾、誘導レーザーを放ちガゾートはそれをプラズマ光弾で撃ち落とす。爆発の衝撃で部屋が荒れる、あたりの家具が吹き飛びカーテンに火が映る。

「戻れ、ガゾート、イフ……………戻れと言っているんだ」

あたりの空気が一気に冷えていくのを感じる。ガゾートとイフは主人の怒りを感じ取りギガバトルナイザーの中に帰っていく。ゆっくりと起き上がると腕を腹にかざす、するとその傷は見る見るうちに治っていく。

腹から内臓を抜き出されたくらいでは死なないようになった。これもベリアルになった恩恵と言うか呪いと言うか、つか家燃えてんじゃんツ!!誰か!!消化器!!水!!!

燃え移ったカーテンをどうにかしようと思っていると突如、部屋の中に突如、雲が生まれ雨と風が嵐となって炎を消していく。

「バリケーン、消化してくれるのはありがたいが、少し抑えろ」

嵐で周りがめちゃくちゃになってしまっている。こいつら加減つてもんを知らんのか。まずいな初日からこれじゃ最終日には家が無くなってるぞ。どうしよう……………まずはヤプールにこれを直してもらおう。家も強化改造してもらわんと、

今日も我が家は人外魔境、あ、そういや俺のこの体ってハイスクールdxdの世界のレオナルドなんだよな、憑依転生しちゃったけど、今後の展開とかどうなるんだろうか?バンダースナッチの流れとか、やっぱ俺が暴走すのかな?嫌だけど。

「マスターこれを見てくれ、前回の戦いで採取したりアス・グレモリー達の細胞を使って作り出したクローンにメカレーター手術を施したその名もリアスメカレーターズだ」

作るな作るな、メカレーターリアス眷属なんて作るな。んなもん作ってどうすんだよ。

「さあ」

さあ、っってお前、なんか目的があって作ったんじゃないかよ。

「なんとなく作ってみただけだよ、その方が楽しいじゃないか」

「こちら、第8戦闘兵器製造工場、こちらに向かって空間移動してくる魔力を感知、数は12から13、緊急戦闘態勢に移行」

アルプス・ヒマラヤ山脈付近、ベリアル帝国軍秘密兵器開発工場、ここで製造されているレギオノイドやダークロプスをワープ装置で開発中のビートスターに送っている。

「目標到達地点P56、ヘルズキング起動、敵の殲滅を開始せよ」

目標地点に現れた魔法陣とそこに出現した魔法使い達にヘルズキングの容赦のない攻撃が襲いかかる。だが、それは中心に位置する3人には当たらなかつた。

「ヘルズキング、か……厄介そうな敵だ」

ゼロ、X、ギンガ、そしてヘルズキング率いるレギオノイドの軍勢、この戦いが後に悲劇を引き起こすことになるとは誰も予想していなかつただろう

毒牙のバレンタイン

なにかを得るにはそれと同等の対価を支払わなければならない。

バレンタイン、それは女の子達の血で血を洗う壮絶なる戦いである。男子はチョコを手に入れようと獣のような双眸でチョコを狙い。女子は好きな男に本命チョコを渡そうとライバル達と足を引っ張り合って仲間を蹴落としそして願いが叶わぬ者には重すぎる代償が貸せられる。チョコを買えた者チョコを買えなかつた者勝者は敗者の悲しみと絶望を背負って生きていかなければならない。それは地獄の縮図と言っても過言ではない。

え？時系列と合ってねえだろって？こまけえこたあいんだよ、とにかくバレンタインがやって来たんだよ!!

「うむ、いい出来だな」

我は暗黒大皇帝エンペラ星人、今日はバレンタインと言う好きな者にチョコと呼ばれる食べ物を渡す日なのだとか、故に余も主の為にチョコレートを作っているところだ。

「ふふ、あとはこのチョコに私の血と髪を入れれば……ウフフ、ウフフフフフフ」

「後は冷蔵庫で冷やし固めれば完成よ」

余はこのような行事には疎いのだが、絶対にチョコに自分の体の一部を入れたり、ダークマターのようなものを渡す行事では無いと断言できる。

「うむ、後は主に渡すだけだが………これは、随分恥ずかしいな」

顔を紅潮させエンペラ星人特製『皇帝チョコ』を見る、ラッピング

はピンク色のものを使って水色のリボンで着飾ってある。なにぶん人にものを、それも自分の想いが詰まっているものを渡すことは初めてで今にも心臓が張り裂けそうである。

「と、とりあえずベムスターやライブキング達には見つからぬようにせねば」

奴らは何でもかんでも食らってしまう故にもし見られでもしたらせつかくのチョコが奴らの餌へと変わってしまうだろう。

「早く主を探さねば」

チョコを隠しながらベリアルを探していると、何やら騒がしい音が聞こえて来た。その中には主であるベリアルの声も聞こえてくる。どうやら女どもに囲まれて何かをやっているようだ、その声を聞くだけで何故だか腹わたが煮え繰り返りそうになる、戸を開けて覗くと。

「今日はバレンタインじゃないよ」

「何言ってますか、もう画面の向こう側はバレンタインなんですよ」

「メタいこと言うなッ!!!」

なかなかカオスな事になっていた。ガッツ星人2人に押さえつけられ、その前に怪獣星人怪獣娘が並びチョコを食べさせていた。

「はい♡トツプバターはヒツポリト星人さんです」

「嫌な予感しかしないんだが」

「主よ、私ごと食べてくれ」

顔以外全身チョコでコーティングした全裸のヒツポルト星人さんが出てくる。

「アウトオオオオオオ!!!」

アウトだよ!!と叫びながらガッツ星人の高速を振り切ろうと力を込めるがまるで体が言うことを聞かない。その事に困惑していると横からヤプールが顔を出しこう答える。

「ふふふ、先程飲ませた飲料水の中に特殊な筋肉弛緩剤を入れておいたのさ」

なんてこった、もはや主はまな板の上のガイロス、翼をもがれたバードン、叫びつつもガッツ星人が両隣から光線で縛り続けているのはそれ程に主の力が強いからであろう。

「わかった!!わかったよ!!食べるから!!」

と言い、全身チョココーティングされたヒツポルト星人の手を取りそれを舐める。チロチロとエロい音が部屋にこだまし、もう何時間も経ったような錯覚を覚える頃にはすでに限界だったヒツポルト星人が鼻血を出して倒れた。勝った、というドヤ顔で頬を赤らめていた主はピースサインをしていた。ちなみに他の連中も鼻血を出している、余もだ。

「す、凄い破壊力だったわ……よし次の挑戦者は……パズズさん!!」

「えと、チョコなんて作った事ないから自身ないんだけど、あの、た、食べてくれますか?」

なんか電撃が迸ってる、青い稲妻がビリビリとチョコから迸っている。何を入れたんだ、何を入れたんだ!!パズズ特製雷電チョコを感電しながら食べる主を見て涙を流しながら『食べてくれた』と嬉しそうに呟いていた。主も食べる事に体に電流が流れるチョコを全て食べ、ご馳走さままで言い切った主に我は敬意を評した。

「うっわあ、まさか全部食べきるとは、愛されてるねパズズちゃん♪続いての挑戦者は……………キメラベロスちゃんです!!」

「さあ、主よ!!私と1つになろう!!」

「はい退場、次の方どうぞ」

キメラベロス、強制退場、どうやらそう言ったものはこの場ではアウトラしい、さっきのヒップリト星人はセーフらしい。基準が分からん。

「さあさあどんどん行ってみよー!!」

カオスなチョコの惨劇はまだまだ続く、マガパンドンの灼熱チョコやグレイフィアの毛がモツサリ鉄分タップリヤンデレチョコだったり、ベロクロンの爆発ミサイルチョコだったり、バキシムが空間を割ってそこからチョコが雪崩混んできたり、色々あってようやくチョコ地獄は終わりを迎えたのであった。

「酷い目にあつた……………」

もうバレンタインは嫌、かつては俺もバレンタインのチョコ欲しさに迷走した事はあつたけど、まさかチョコを貰う側がこんなにも苦勞する行事だったとは……………全国の男子の皆さんには悪いけど次

からバレンタインの日はどっかに隠れよう。ん？エンペラ星人、どうした、

「余もチョコレートとやらを作ってみたのだ」

それは今までの道程、チョコとは言い表せないような悲惨なものたちと比べてそれはそれはまさしくバレンタインの本命チョコと呼ばれるものだった。

「いいのか、俺が貰って……………」

「何を言い出すのかと思えば、余は最初から主に食べて欲しくて作ったのだ、ハッピーバレンタイン、主よ」

目尻が熱くなってくる、それを無理やり押さえつけて丁寧にチョコの包装を剥がしていく、そしてその中に入っているハート形のチョコを取り出し、思いつきりそれにかぶりついた、口の中でとろけ、程よい甘さが口いっぱい広がる、噛めば噛むほどチョコは溶け口全体に広がる、そしてそれを揉みこむとその先に広がる世界はこの世のものとは思えないぐらい幸せに包まれた世界だった。ツー、と頬を冷たい何か伝わりそれが思考を現実へと引き戻した、現実に戻るとまたチョコに齧り付く、そしてチョコを全て食べ終わった後涙は止まっていた。

「ありがとう、とっても美味しかったよ……………」

それはそれは、子供のような笑顔だったとき、